関西大学『社会学部紀要』第32巻第3号，2001，pp.237－297　　ISSN 0287－6817

パタン・ランゲージをもちいた大学キャンパスの探索的調査（1）
－学生によって指摘された問題点－

雨宮俊彦・内藤健一

An Exploratory Survey of University Campus using Pattern Language (1) : Problems Indicated by the students.

Toshihiko AMEMIYA　Kenichi NAITOH

Abstract

237 students were asked to evaluate and propose a reform plan of their university campus as a course report of environmental psychology. These students had been instructed following 23 patterns from Alexander's pattern language. Four-story limit, Main gateways, Raised walk ,Street cafe, Positive outdoor space , Hierachy of open space, Courtyards which live, Paths and goals, Activity pockets, Stair seats, Intimacy gradient, Common areas at the heart, Tapestry of light and dark, Private terrace on the street, Alcoves, Window place, Workspace enclosure, Ceiling height variety, Small panes, Seat spots, Sitting wall, Ornament, and Pools of light. The format of Alexander's pattern language consists of three parts: i.e., a problem, detailed analysis of the problem posed and concrete advice.Students were asked to write their reports in a style similar to the format of Alexander's pattern language. This paper presents a summary of the problems indicated in the students' reports. Problems are arranged according to the site in the campus map. The results show that Alexander's pattern language is a useful frame for an exploratory survey.

Key Words: Pattern Language, University Campus, Exterior Design, Territoriality, Amenity, Exploratory Survey, Free Answer Survey, User Centered Design

抄　録

学生に、大学キャンパスを評価し、改善案を提示するようもとめた。課題におうじた学生は、環境心理学受講生237名である。学生には、講義のなかで、アレグザンダーのパタン・ランゲージのなかから、以下のパタンを紹介した。4階建ての制限、大きな門口、小高い歩道、路上カフェ、正の屋外空間 、段階的な屋外空間、生き生きとした中庭、歩行路と目標、小さな人だまり、座れる階段、親密度の変化、中心部の共域、明暗のタピストリー、街路を見おろすテラス、アルコーブ、窓のある場所、作業空間の囲い、天井高の変化、小割の窓ガラス、腰掛けの位置、座れるさかい壁、装飾、明かりだまりの23である。学生には評価と改善案の提示をパタン・ランゲージにおける、問題点の指摘と根拠の明示、勧告のスタイルにならうよう指示した。本論文では、学生によるキャンパス環境の問題点の指摘を、場所ごとに整理して報告する。学生の指摘は、キャンパス環境のおおくの場所と問題点におよんでおり、パタン・ランゲージが環境評価の探索的調査のための枠組みとして有効であることをしめしている。

キーワード:パタン・ランゲージ、大学キャンパス、屋外環境デザイン、領域性、アメニティー、探索的調査、自由記述調査、利用者中心デザイン

はじめに
1．パタン・ランゲージと探索的調査について
2．学生による問題点の指摘
補足．環境心理学の講義について
参考文献

はじめに

家や公共施設、都市などの人工環境は、人間の行動と交流、社会生活の舞台である。人工環境は、雨風からひとをまもり、予算と法令の制約のなかで、必要な数の人を収容できれば、あとは、アメニティーとかいうありがたい外来語、生活の余裕がでてきてやっとありつけた、情緒的なプラスアルファをつけくわえればよい、といったものではない。人工環境のありかたは、人々の行動と交流、社会生活のありかたを、基本的なところで規定している。もちろん、環境決定論が想定するように、よい人工環境を提供すれば、のぞましい行動や交流が、ただちにしょうずるというような、単純な因果関係はなりたたない。しかし、不適切な人工環境のもとでは、のぞましい行動や交流を期待することはきわめてむずかしくなる。

たとえば、家の共同領域やアクセス経路、個室のつくりかたは、家族関係のありかたと、屋敷や下町といった住居と共同領域の形態はそのコミュニティーのありかたと、それぞれ密接に関連していることが指摘されている（小林1992)。また、犯罪と高層住宅の形態との関連の研究は、ニューマンの古典的な研究以来（Newman1972）日本でもはやくからなされている（湯川1987)。これらの研究にもとづいて、さまざまなライフスタイルにおけるプライバシーと交流欲求をみたしうるような家や集合住宅、安全な高層住宅の工夫がなされつつある。コミュニティーについても、地方自治体による景観についてのガイドラインのとりくみも、なされるようになってきた（吹田市1994、1995、1996、1998)。景観以外の安全性の問題などについても、子供の犯罪被害とコミュニティーにおける人工環境の関連などの指摘もされるようになっており（中村2000)、今後のとりくみが期待できる。

雨宮は、関西大学社会学部で、環境心理学をおしえている。環境心理学の講義では、うえでのべたような環境デザインのはなしをする。小林（1992、1997）の主張する人工環境の利用者によるカスタマイズや、アレグザンダーら（1977）がとなえているような、利用者が参加する環境デザインの意義についてもはなす。そうしていると、講義をきいている

学生や自分が長い時間をすごしている関西大学社会学部は、人工環境としてどうだと気になってくる。それをほっておいて、人工環境デザインが、いかにあるべきかなどと、喋喋してもむなしい。

内藤は、認知地図研究の専門家である。認知地図の研究の課題としては、関西大学のキャンパスを対象とすることがおおい（たとえば、内藤2000など）。関西大学社会学部で学生として9年をすごし、現在は、関西大学社会学部で実習を担当している。研究教育生活の場として、環境心理学の研究者として、人工環境としての関西大学社会学部の問題点を熟知している。

2000年になって、社会学部の学舎の増築の委員会ができ、増築を予定しているときいた。雨宮は委員ではない。しかし、一教員として、つぎのようにかんがえた。増築は現状の問題点の改善のチャンスとなるかもしれない。また増築にあたっては、意志決定者、設計者におまかせにするのではなく、現在、利用者としての学生が感じている問題点は、なんらかのかたちでフィードバックするようこころみるべきである。利用者参加型のデザインの必要性をいう立場からは、利用者の意見は不要だとはいえない。（もちろん、近年は、プロによる設計も、環境心理学的な考慮をふまえたものになってきている。しかし、雨宮・内藤2000で指摘したような、環境デザインとしての明白な失敗作の例もあるので、プロだから大丈夫だろうとはやはりいえない。）

そこで、2000年前期の環境心理学の講義で、学生へのレポートの課題として、社会学部学舎を環境デザインの観点から評価し、改善案を提示するようにもとめた。学生が2年以上にわたって生活してきた社会学部学舎を、環境心理学の講義でおこなった一般論の事例をつうじた検討の課題としたのである。

237部のレポートが提出された。多種多様な問題点が指摘されていたが、玄関ロビー、食堂、旧館の階段、101教室とその前の部分、旧館と新館のつなぎ部分、旧館3階、4階のあかりとり、社会学部学舎南の築山と中庭、全体としての暗さ、などおおくの学生が共通して指摘した問題点もかなりあった。また、教員の立場からは、気にとめなかったような指摘もおおかった。雨宮は、試験のあとなど学生が廊下でたむろしているのを、これまで、試験のじゃまだと不愉快におもってきた。しかし、レポートに、教室の外にいる場所がない、社会学部の学舎が暗い、講義がないときには経商のロビーや法文のほうへいっている、などの記述があるのをよんで、認識をあらためなくてはとおもった。

レポートは、文章や絵、写真などからなる自由記述で、量もおおい。まとめは、かなりの作業になった。学生の改善案には、安易なものもあったが、なかには非常にすぐれた内

容のものもあった。学舎の増築とかかわると判断した部分については、レポートの一部分のみをまとめて、問題点の指摘と改善案を、2000年9月22日に学舎増築委員会に提出した(雨宮・内藤2000)。

本論文では、提出されたすべてのレポートを対象に、どんな問題点が指摘されたか報告する。改善案のまとめと検討は次の論文であつかう。学舎の増築案ができて、実施されたら、その部分についても、評価を報告することを予定している。今回の調査は、レポートによる集計の結果を、報告書、論文として公表するものである。つぎのステップとしては、利用者による環境評価とその公表を、ホームページ上でおこなうことも計画している。

以上のべたように、今回の調査の目的は三重のものである。目的のひとつは、著者たちが生活の場としているキャンパスの環境デザインとしての評価と改善のための資料をえることである。ふたつめは、パタン・ランゲージをもちいた利用者参加型の探索的な調査の有効性と問題点をしらべることである。みっつめは、環境心理学の教育において実際的課題を課すことである。

今回の論文では、パタン・ランゲージを枠組みとしてつかった環境評価の部分のみを報告した。環境の改善案については、つぎの論文で報告する。環境評価を一部としてふくむ、より全体的な問題である利用者参加型の環境デザインについての議論や、アレグザンダーらによる利用者参加型デザインの位置づけについては、次回の論文でおこなうことにしたい。

以下、1では、まず、今回の調査の特徴について説明する。2では、今回の論文の主要な結果である学生による問題点の指摘を、学舎の場所ごとにわけて記述した。2は、学生のレポートから問題点の指摘とその理由の部分をぬきだしてまとめたものである。今回の報告だけをよむと、批判のための批判といった印象を与えるかもしれない。しかし、今回報告する問題点の指摘は改善案の提案につながる前段部分のみであることを強調しておきたい。最後に、補足では、今回の調査がおこなわれた環境心理学の講義の概要について説明した。

1．パタン・ランゲージと探索的調査について

1．1．今回の調査とパタン・ランゲージ

今回の調査は、環境心理学の講義の一環として、レポート課題としておこなったもので

ある。レポート課題は、講義の開始時に、つぎのようにアナウンスした。（環境心理学の具体的な講義内容については補足でのべた。）

「レポート課題は、「社会学部学舎改善案」とします。レポートの形式は、アレグザンダーのパタン・ランゲージにならい、現状の社会学部学舎の問題点を指摘し、改善案をしめし、その理由をのべるものとします。問題点の指摘や改善案には、図をもちいてください。A4、横書きで、枚数の制限はとくにありません。提出期限は、定期試験のときまでとします。」

講義では、アレグザンダーらのパタン・ランゲージ（Alexander,C., Ishikawa,S. and Silverstein,S. 1977）のパタンから、23をえらび、講義の進行にあわせて解説した。学生はその解説や、講義、自分でしらべたことをもとにレポートをかいた。

アレグザンダーらのパタン・ランゲージは、環境デザインにかんする253のトピックの記述を集成したものである。トピックは、1.「自立地域」、2.「町の分布」から、253.「自分を語る小物」まで、環境デザインの非常にひろい範囲の問題をカバーしている。各トピックの話題は、a.表題、b.関連する上位のパタン、c.問題点の指摘、d.問題点の解決に関連する知見の検討、e.デザイン上の勧告、f.関連する下位のパタンの六つの部分からなっている。以下に例をひとつあげ、おおざっぱに要約して紹介する。写真や図解は省略する。

a.表題　「55.小高い歩道」

b.関連する上位のパタン　このパタンは、「52.人と車のネットワーク」と「54.横断歩道」の完成に役立つ。「23.平行道路」でもこのパタンが必要になることがある。

c.問題点の指摘　　都市内の歩行者と速い車の合流点では、車が歩行者を圧倒する。車が王様になり、人間は自分を小さな存在に感じる。

d.問題点の解決に関連する知見の検討　　まず、歩道の幅の検討などから、歩道を車道にたいして高くすることの必要性が指摘される。つぎに、歩道を車道より約45cm高くするとよい理由が三つあげられる。ひとつは、人のほうが車より象徴的に重要だとかんがられるからである。ふたつめは、車の車輪の半径の寸法より高くすると、車がのりあげてこないという確信をあたえるからである。みっつめは、歩道を車道より約45cm高くすると、自然な視線の方向である俯角10度で車が視野をさまたげなくなるといった検討がなされている。

e.デザイン上の勧告　速い車が通る道路ぞいの歩行路は、つねに道路より約18インチ

(45cm) 高くし、道路ぞいに低い壁、手すり、欄間などを設け、道路の縁を明示すること。道路の片側だけに小高い歩道を設けること－しかも、できるだけ幅広くすること。

f.関連する下位のパタン　「243.座れるさかい壁」、「119.アーケード」、「125.座れる階段」などのパタンが、このパタンをつくるのに有用である。

環境心理学の講義でパタン・ランゲージを紹介したのは、d.の問題点の解決に関連する知見の検討が、はばひろく心理学や社会学、従来の建築の工夫などの経験的な知見を明示的にしめし、e.のデザイン上の勧告にむすびつけているからである。「55.小高い歩道」でも、立ったときの人間の自然な視線の方向が俯角10度という教科書的な事実が、実際的な歩道デザインとむすびつけられているので、研究上の知見をどう実際問題に適用するかの見本となる。

レポートでは、パタン・ランゲージの記述のなかの、c.問題点の指摘、d.問題点の解決に関連する知見の検討、e.デザイン上の勧告の三点にならうように指示した。社会学部学舎の問題点の指摘、なぜ問題なのかの理由と改善のための根拠の検討、改善案の提示である。ただし、パタン・ランゲージで問題として指摘されているのは一般的な環境デザインの問題であるのにたいし、レポートで問題として指摘するのは、具体的な学舎の問題点である。したがって、問題点の理由や改善案の根拠も、より具体的レベルにおりたもの、たとえば個々のパタン・ランゲージの勧告であってもよい。また、改善案については、経済的な制約条件もあるので、コストがすくないもののほうが望ましいが、よい案がなければコストを考慮にいれないものでもよい、場合によっては、問題点の指摘のみで改善案が提示できなくてもさしつかえないと指示した。また、問題点と、理由・根拠の検討、改善案の提示はひとつの問題だけでも、複数の問題であってもよいと指示した。

講義で紹介した23のパタンは、環境心理学のなかのみっつのトピック、A.アレグザンダーのパタン・ランゲージについて、B.みて移動する空間のデザイン、C.プロクセミクスと領域性で紹介した。以下、ごく簡単に説明する。

A.アレグザンダーのパタン・ランゲージについて

ここでは、アレグザンダーの環境デザインの方法論について解説した。ここで、とりあげたパタンは以下のみっつである。

「125.座れる階段」

「239.小割の窓ガラス」

「249.装飾」

「125.座れる階段」は、階段は移動のための施設であると同時にすわれる場所であってもよいようにデザインすべきというパタンである。これは、アレグザンダーが「都市はツリーではない」（Alexander,C. 1965）において、ツリー構造の計画都市を批判して、自然都市のセミラティスの構造の必要性をいったのに対応するパタンである。このパタンでは、階段という下位の要素が、移動のための施設と休息のための施設という二つの上位のカテゴリーに同時に属すことによって、セミラティス構造が成立している。「243.座れるさかい壁」も同様の例である。「239.小割の窓ガラス」と「249.装飾」は、アレグザンダーの反近代主義建築のかんがえをしめすものとして紹介した。アレグザンダーは、反装飾的で、広い板ガラスをもちいた、ミースファンデルローエやコルビジェなどの近代主義様式が大嫌いなのだと学生には説明した。「21.4階建ての制限」は高層建築批判、「135.明暗のタピストリー」は均一照明批判として、やはり近代主義建築批判として位置づけることもできる。「249.装飾」では、アレグザンダーは、近代主義建築が否定した装飾の意義を部分間の統一感をもたらすなどと理詰めで論証しようとしている。しかし、「239.小割の窓ガラス」で、広いガラス窓より、小割の窓ガラスの方が、外の世界と、より密接に接することができるという議論は、やや苦しい。アレグザンダーのパタンには、近代主義様式大嫌いというところからきているものがあるので、すべて正しいものとして天下り式にうけいれるのではなく、その妥当性については自分で判断するように学生には強調した。

B.みて移動する空間のデザイン

認知と行動の場としての人工環境のデザインについて解説した。ここでとりあげたパタンは以下の12である。

「55.小高い歩道」

「88.路上カフェ」

「106.正の屋外空間」

「114.段階的な屋外空間」

「115.生き生きとした中庭」

「120.歩行路と目標」

「124.小さな人だまり」

「135.明暗のタピストリー」

「180.窓のある場所」

「241.腰掛けの位置」

「243.座れるさかい壁」

「252.明かりだまり」

「55.小高い歩道」についてはすでにのべた。人間の自然な視線の方向と視野を歩道と車道の関係に援用したパタンである。「88.路上カフェ」と「114.段階的な屋外空間 」、「124.小さな人だまり」は、屋外と屋内の中間領域、境界部分の利用が、人々のつどう環境を活性化するうえで重要であることを指摘したパタンである。「106.正の屋外空間」では、人々の活動の場となる屋外空間が、適度におおわれ、また適度な開放性をもった図の空間であるべきことをいっている。これは、カミロ・ジッテによる古典的な広場研究の知見をひきついで、ゲシュタルト心理学の用語で表現したもので、芦原（1974）のいうPositive空間とおなじ内容の指摘である。「115.生き生きとした中庭」では、中庭が有効につかわれるためには、よりおおきな屋外空間への眺望を確保し、複数のアクセス路を用意すべきことを指摘している。「243.座れるさかい壁」では、さかい壁がシンボリックななわばり表示物程度でも十分であることがふつうなのに、空間的な障壁になっているようなさかい壁がおおすぎることを指摘し、すわれるようなさかい壁も大切であることをいっている。また、「241.腰掛けの位置 」では、しゃれたベンチよりも腰掛けの位置が重要で、風や直射日光をさけ、快適な眺望のえられるような場所をえらぶべきことをいっている。「120.歩行路と目標」では、歩行路の設計がむつかしいこと、60～90mごとに視覚的な目標を設置すべきことをいっている。「135.明暗のタピストリー」では、人間があかるい方向へむかって移動する傾向があることを指摘し、明るい方向へむかって移動すれば自然に目標に到達できるように室内での採光や照明を設定すべきことを指摘している。「180.窓のある場所」では、人間が明るい場所にこのんであつまる傾向があるので、ひとがとどまれる場所を、すくなくとも一カ所は窓のある場所に設定すべきことを指摘している。「252.明かりだまり」では、ひとびとがあつまる焦点に部分的に照明すべきことをいっている。

B.のパタンは、活気のある屋外空間にかんするものがおおくなった。これは、現状の大学の空間では屋外空間が上手につかわれていないが、あまり費用をかけずに改善可能だろうというみとうしがあったため、学生の注意を屋外空間にむけるというねらいがあった。また、135.明暗のタピストリー、180.窓のある場所、239.小割の窓ガラス、252.明かりだまり、など、採光と照明にかかわるパタンがおおくなったのは、講義での解説のためだったが、期せずしておおくの学生がかんじている、社会学部学舎における暗さの印象、採光と照明の不適切さの指摘と対応することになってしまった。

C.プロクセミクスと領域性

対人関係と社会活動の場としての人工環境の講義では、以下の8つのパタンを解説した。

「21.4階建ての制限」

「53.大きな門口」

「127.親密度の変化」

「129.中心部の共域」

「140.街路を見おろすテラス」

「179.アルコーブ」

「183.作業空間の囲い」

「190.天井高の変化」

「21.4階建ての制限」については、地上から各階までの距離と伝達可能な人間関係情報についてプロクセミクスの観点から紹介した。4階建ての距離では、地上の人の顔の表情は識別できなくなり、声の調子もききとれなくなる。「190.天井高の変化」は、パーソナルスペースの概念を、天井高の変化というデザインの問題と関連づけたものとして紹介した。天井高が高いとパーソナルスペースがおおきめに設定されフォーマルな人間関係にふさわしい空間になり、低いとパーソナルスペースがちいさめに設定されインフォーマルな人間関係にふさわしい空間になる。低い天井では、音が反射しやすく、対人距離がちかめに認知されやすいことも指摘されている。「179.アルコーブ」は、天井の高さのひくい、くつろぎと親密な人間関係のための伝統的な建築における空間である。

「53.大きな門口」、「127.親密度の変化」、「129.中心部の共域」、「140.街路を見おろすテラス」、「183.作業空間の囲い」は、人間の基本的な要求である、まわりとの交流への欲求と、まわりからはわずらわされたくない欲求のふたつを、個人⇔家庭・職場⇔コミュニティーの、それぞれの境界においていかに両立させるかのパタンである。図0に、それぞれの境界と関連するパタンをしめした。いずれも、まわりからは侵入されたり、わずらわされることなく、同時に交流欲求もみたすような空間をどうつくるかの解決案である。たとえば、「183.作業空間の囲い」では、個人の作業場は、背後が適度におおわれていて、前方は眺望や交流にひらかれているのがのぞましいことを、簡単な調査データにもとづいて指摘している。「129.中心部の共域」は、家庭でも、職場でも、どんなコミュニティでも、成員が場所をともにする共域が必要なこと、それは成員のアクセス路に接した中心にあるべきことが指摘されている。「127.親密度の変化」では、家庭や職場の空間が、種々のレベルのプライヴァシーと交流への欲求に対応すべきであり、その配置がプライヴァシー欲求の程度に

したがって順序づけられるべきであることが指摘されている。「53 大きな門口」では、コミュニティや集合住宅などの境界に、領域表示物としての大きなゲートをおくことが、領域性の確保にとって有用であることがのべられている。「140.街路を見おろすテラス」は家庭のテラスをコミュニティーの道路より高く設定し、家庭からはのぞむときに道路がながめられ、道路からは家庭のなかがのぞかれないようにすれば、家庭とコミュニティーの間の、個別的閉鎖性と共同的開放性のバランスがとれることを指摘している。これは、家庭とコミュニティーの間の、個別性と共同性の欲求の両方をみたすアメリカ式住宅に典型的にみられる解決方式である。小林（1992）で報告されているように、最近では日本でも、集合住宅での廊下に面した側に、同様の方式が適用されている。家庭とコミュニティーの間の、個別性と共同性の欲求をみたす別の方式としては、町屋の格子窓方式がある。これは、高さの差ではなく、道路から室内を覗くことは格子がじゃまでできないが、室内からは道路がうかがえるという方式である。この方式は、対明所性として、防犯でつかわれている。講義では、「140.街路を見おろすテラス」を例にとって、アレグザンダーの指摘している問題は普遍的なものだが、具体的な解決策にはアレグザンダーがあげている以外の案もあることを強調した。

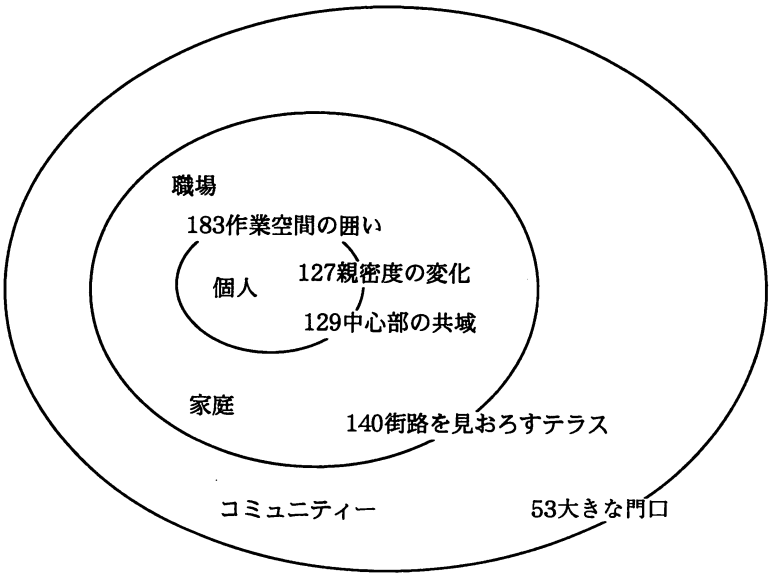

図０．個別的閉鎖性と共同的開放性のバランス

以上、23のパタンを紹介した。

パタン・ランゲージには、18.学習のネットワーク、43.市場のような大学、83.師匠と弟子、148.小さな作業集団、151.小さな集会室、など、大学教育のありかたと直接関連した場所にかんするパタンがあるが、これらは紹介できなかった。環境心理学の講義では、一般的な環境デザインの問題をあつかっていたので、みて移動する空間のデザインやプロクセミクスと領域性と関連した、一般的なパタンだけしか紹介できなかった。大学教育のありかたと直接関連した場所にかんするパタンも紹介したなら、問題点の指摘や、改善案にも、影響があったと予測される。たとえば、マスプロ教育ではなく、もっと少人数の活動を中心にした教室をふやすべきとか、教員の研究室とゼミ生の部屋を工房のようにむすびつけるべきなど、教育の内容に直接関連した指摘や改善案である。ただこれは、たんなる環境デザインをこえて、教育のありかたとも密接に関連してくるので、環境心理学の基本的な課題ではなくなる。今回の調査は、環境心理学の基本的な課題としておこなったものなので、教育＋キャンパス改善案としては、たりないということになる。

オレゴン大学の実験（Alexander,C., Silverstein,S., Angel,S., Ishikawa,S. and Abrams,D.1975）では、アレグザンダーらが、大学の増築にあたって、利用者参加型のデザインを実践している。ここでは、計画段階で、パタン・ランゲージから関連性のある37のパタンを、学生もふくめた計画参加者が共有して、増築計画をたてていった。37のパタンには、「21.4階建ての制限」や「106.正の屋外空間 」など、本調査でももちいられたのとおなじパタンや、18.学習のネットワークなどのパタンも採用されている。これに大学コミュニティー独自のパタンとして、18のパタンがくわえられている。オレゴン大学の実験では、環境の利用者参加型の診断の段階でも、パタンをもちいて、たとえば「106.正の屋外空間」が実現されているか否かを地図にえがくなどして、つねにフィードバック評価をおこなっていき、つぎの改修にいかすことがのべられている。

オレゴン大学の実験もふくめた、利用者参加型のデザインについては、改善案の検討をおこなう次回の論文で、よりくわしく報告する。つぎに、今回のような探索的な利用者参加型調査について、ふれておこう。

1．2．探索的な調査の方法について

一般に調査研究では、データ、とくに数量化されたデータをえたあとの処理については、研究がすすんでおり、種々の分析の道具だても完備している。これにたいし、どのようにデータをえるかについては、あまり体系的に研究がすすんでいないのが現状である。しか

し、真実をあかすべき調査研究にとっては、データをどのようにえるかは非常に重要である。いくらすぐれた手法でデータを処理しても、出発点としてもちいる項目がかたよっていたり、不十分だと、よい調査はできない。

視覚的表示を利用してブレーンストーミング的に衆知をあつめる方法を考案し、KJ法となづけた川喜田二郎（1986）は、つぎのようにいっている。

「あるテーマについて、市民の世論の真の声を探るとか、潜在顧客の真のニーズを探ろうというとき、今日至るところで使われているのは質問紙法である。すなわち、テーマの分析上必要らしいいくつかの質問項目が設けられている。これらの項目はなんらかの仮説が前提となり、分析の結果がその仮説の検定に役立つようにという想定のもとに、作られているのである。無仮説で三六〇度的に意見を探るように作られていないことが多い。すなわち、イエス、ノー、その他、などという枠がきめられている。

そして被面接者を誰から選ぶかは、母集団の中から、統計学的信頼性などを顧慮しながら、「市民の何分の一」などを乱数表で任意抽出する。それは、結果を定量的に分析することを第一義に狙っているからなのである。そうして、回収率が何パーセントにせよ、ともかく回収した回答を統計的に分析する。最後に分析の結果得た少数の定性的結論をいくつか組み合わせ、「市長の政策の支持率は何パーセントに転落した」などと結論を出す。

このようなやり方は、まったくの誤りとまで評せないにしても、実に有効性が乏しく、時として誤りに近い。商品を売りだす場合なら、こういう方法を全面的に信頼すると、へたをすれば破産してしまう。

では、正しい道はどうすればよいのか。質問紙法のような定量的な主調を持つ方法をいきなり適用する前に、まず定性的な取材ネットとデータの定性的な処理法を採用すべきなのである。その判断の上に立って、定量的な方法をそれに重ねあわせて適用するのが正しいのである。」(p226)

具体的には、川喜田は、調査したいテーマにかかわりのふかい十数名の、できるだけ多様な被験者をあつめて、KJ法によってまず幅広く項目をあつめるべきであることをいっている。ようするに調査者が設定した確認的、定量的な手法をもちいる前に、テーマにかかわりのふかい多様な被験者のブレーンストーミング的な取材による、探索的な調査をおこなう必要があり、その手法としては、カードとその並び替えをもちいるKJ法がよいという意見である。

川喜田の意見のポイントは、調査したいテーマにかかわりのふかい多様な被験者をパネルとしてえらぶこと、KJ法のようなブレーンストーミング的な手法によりできるだけ多く

の意見を集約すること、この二点である。これは、研究の蓄積によって、すでに調査項目が十分に整理され、共有化されているような領域ではない、探索的な調査にたいしては、まったく妥当な研究方針である。

小島・古賀・那須（1996）は、川喜田の意見にそうようにしておこなわれた環境調査である。この調査では、住民にカメラと景観カードをもたせ、対象となる地区を歩いてもらい、写真をとりコメントを自由にかいてもらっている。つぎにそれをKJ法で、集約し、さらに多変量解析のデータとして規格化してつかうというステップをふんでいる。小島（1997）は、こういった調査手法を、これまでのできあいの質問紙による一律の調査にかわる、被験者の個人差をいかした調査方法として定式化しようとこころみている。小島らのこころみは、川喜田のいうような、テーマにかかわりのふかい多様なパネル＋ブレーンストーミング的な手法による、テーマの効果的な探索を、多変量解析につなげようとする研究として重要である。

川喜田と小島らの探索的な調査のポイントは、テーマにかかわりのふかい多様なパネル＋ブレーンストーミング的な手法による集約の二点である。川喜田と小島らが指摘していない、探索的な調査のもうひとつのポイントは、シソーラスの利用である。たとえば、性格検査や、感覚の多変量解析的研究などでは、出発点とする項目としては、辞書から関連項目をぬきだして利用することがおおい。たとえば、日本の代表的な性格検査であるYG性格検査の出発点は、辞書における性格を形容する用語をぬきだしたものだった。シソーラスには辞書以外にも、チェックリストや、各領域の百科全書的なものなどさまざまにある。調査にあたっては、調査者がシソーラスから、直接に関連する項目をぬきだす場合もあれば、パネルに参考としてあたえる場合もある。

以上、探索的な調査のポイントとして、三点をあげた。

A.テーマにかかわりのふかい多様なパネルの選択

B.自由記述やブレーンストーミングなどによる多様な意見の集約

C.必要におうじてのテーマに関連したシソーラスの利用

今回の調査は、探索的な調査としては、つぎのようになる。

A.環境心理学に興味をもち、学舎を２年以上にわたって利用してきた学生をおおく選択した。

B.自由記述によって、問題点の指摘と改善案をもとめた。

C.パタン・ランゲージから23のパタンを選択して解説した。

パタン・ランゲージは、環境デザインにかんする様々な問題が集約されているので、環

境デザインの問題をどういう観点からとらえたらよいかの、ある種のシソーラスとして位置づけられるだろう。問題は、1．1．でものべたが、253のパタンから何を選択するかで、今回の調査では、環境心理学における認知的側面と社会関係のふたつの基本をおさえるような23のパタンを選択し、パネルに提示した。この選択は、調査に一定のバイアスをあたえることになるが、テーマにかかわりのふかい多様なパネルに、問題をとらえるための視点をあたえ、環境デザインを意識的にかんがえ、各自の多様な経験とかんじかたを意見としてひきだす、酵母のようなはたらきをしたとおもわれる。実際、何人かの学生から、今回のレポートはしんどかったけど、ふだん何気なく感じていることを、はっきりさせることができて面白かったというようなことをきいた。建築学では、データは、数値回答や言葉だけではなく、スケッチマップや写真など多様な種類のデータがもちいられてきた(Zaidel,J. 1984)。今回のレポートでも、言葉による記述だけではなく、スケッチマップや写真がおおくもちいられた。本論文でつかった写真は、すべて、学生が提出したレポートのなかから選択したものである。

探索的な調査として、今回できなかったのは、パネルが多すぎたため、パネル間のブレーンストーミング的な集約が適用できなかったことである。次回に報告する、改善案の報告では、パネルをしぼって、パネル間のブレーンストーミング的な集約をこころみてみたいとかんがえている。探索的な環境調査のシソーラスとして、パタン・ランゲージ、とくに今回の23のパタンの選択が妥当だったかは、問題点の指摘と改善案の具体的な内容の検討をふまえて、評価をおこないたい。

2．学生による問題点の指摘

2．1．社会学部の図面

まず始めに、社会学部学舎（第3学舎）の図面を示す。図面中の英字は、次で述べる、問題が指摘された場所を表す。

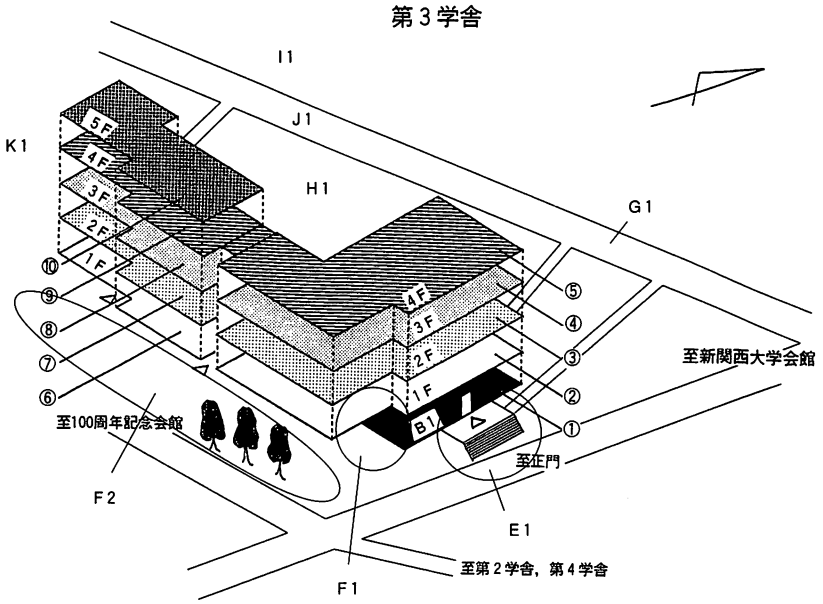

図１．第３学舎全景

学舎		教室・事務室等
旧館	①地階	玄関ホール、食堂
	②１階	教授室、学部事務室、101教室
	③２階	201～202教室、204～206教室、学生控室（談話室）、女子控室、読書室
	④３階	301教室、303～306教室、308教室
	⑤４階	401～404教室、406教室、422教室、パソコン実習室
新館	⑥１階	116教室、118教室、マス・コミュニケーション学実習室、マス・コミュニケーション学AV実習室、マス・コミュニケーション学実習準備室、救護室
	⑦２階	216教室、218教室、220教室、社会調査実習室、社会調査集計分析室、社会調査実習準備室、社会福祉・病理資料室、自習室
	⑧３階	313教室、情報処理理論実習室、コンピュータ実習準備室、コンピュータ実習室
	⑨４階	応用心理学実験実習室、心理実験室、心理検査室、応用心理学実験実習準備室、社会心理学実験実習準備室、社会心理学実験実習室
	⑩５階	511教室、産業社会学実習室、産業社会学実習準備室、人間関係実験室

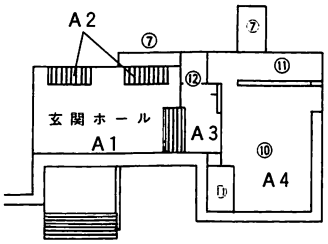

図２．第３学舎旧館B１階

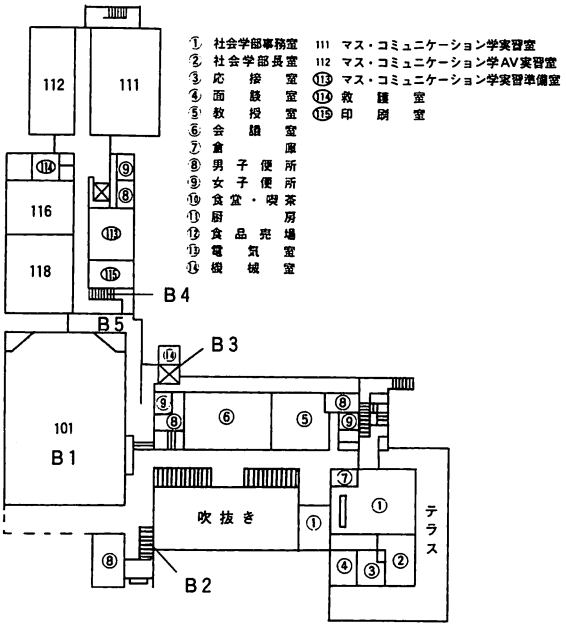

図３．第３学舎旧館１階、および新館１階

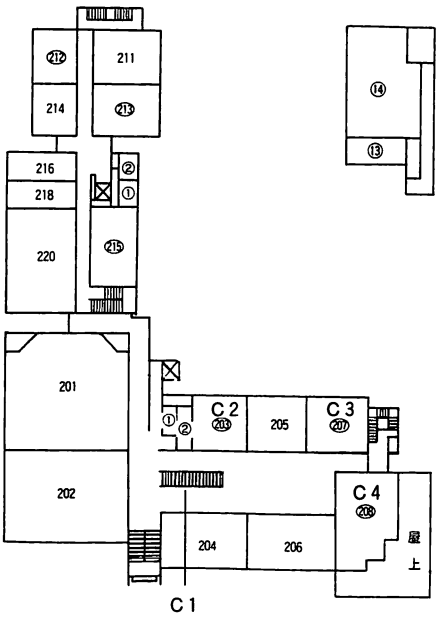

図４．第３学舎旧館２階、および新館２階

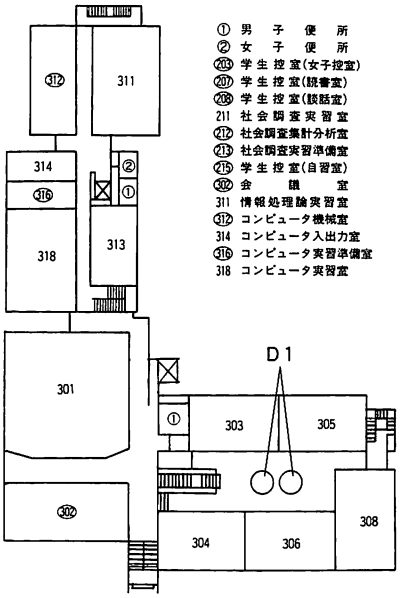

図5．第3学舎旧館3階、および新館3階

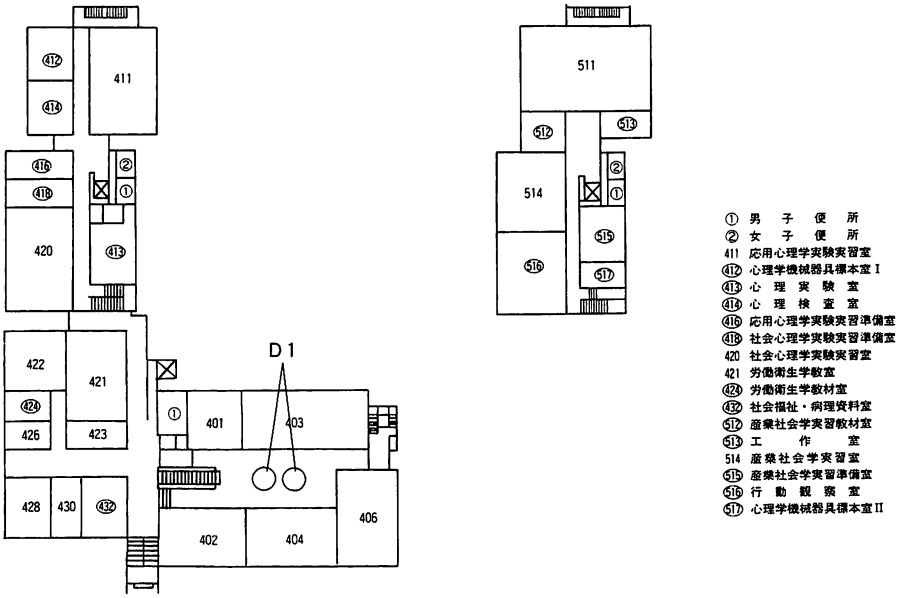

図6．第3学舎旧館4階および新館4階（左側）と新館5階（右側）

2．2．問題が指摘された場所とその理由

2．2．1．集計方法

237名全てについて、問題が指摘された場所を旧館、新館、旧館と新館の両方に関わるもの、学舎外部に分類・整理すると共に、問題を指摘した被験者数をカウントした。その後、その場所が問題として指摘された理由の集計を行った。

なお、2.2.2.及び2.2.3.で述べる、問題が指摘された場所に関しては、2.1.の図面中に英数字で示した。また、その場所が問題として指摘された理由に関しては、内容的に関連するものをまとめ（同じ内容の理由をあげている場合には代表的なもののみを示した)、小見出しを付した。

2．2．2．集計結果の概略

次節において、問題が指摘された場所とその理由を、学舎内部のものに関してはフロアー別に、学舎外部のものに関しては空間的に近接しているもの順に結果の詳細を示すが、ここでは、問題が多く指摘された場所順に、集計結果の概略を示すことにする（表1-1から1-6を参照)。

表1-1　集計結果の概略（1）
（問題が指摘された場所、指摘した被験者数、2.1.の図面での場所、
小見出し（指摘数；指摘の多い順))

学舎正面玄関	68名	E1	大学の外にある、学舎正面玄関（17）
			学舎正面玄関前の階段の利用の仕方（11）
			入口のドア（8）
			学舎の外観（8）
			学舎正面玄関前の道路（7）
			学舎正面玄関前の階段の構造（5）
			学舎正面玄関の印象（4）
			学舎入口周辺のアイデンティティ（3）
			学舎正面玄関前の空間（3）
			入口のドア付近の屋外部分（2）
			学舎正面玄関の意味（2）
			学舎正面玄関前の階段に対する印象（1）

玄関ホール（ロビー）	55名	A1	場所の役割（25）
			明るさ（10）
			光の量と質（10）
			圧迫感・閉塞感（9）
			壁・床・天井（3）
			居心地（3）
			バリア・フリー（1）
食堂	46名	A4	食堂の構造、食堂内の動線（36）
			食堂内の種々の問題（13）
			学舎内での食堂の位置（11）
			食堂の機能（8）
			食堂からの眺望（4）
			食堂へのアクセス（2）

表1-1に、学舎正面玄関、玄関ホール（ロビー）、食堂についての集計結果の概略を示した。なお、各被験者が一つ以上の理由をあげていたり、集計段階において明らかに同じ内容の理由をあげている場合は集計しなかったことから、各表における指摘した被験者数と、小見出し（指摘数）の合計数は一致しない。

まず学舎正面玄関に関して最も多く指摘された問題は、学舎自体が大学キャンパスの外側に位置しているため学部としての明瞭なアイデンティティを欠く、などの“大学の外にある、学舎正面玄関”であった。その次に、学舎前にある階段の利用の仕方の現状（多くの学生が腰掛け通行の邪魔になること）を問題として指摘する場合が多かった（“学舎正面玄関前の階段の利用の仕方”）。それ以外では“入口のドア”（狭いこと）、“学舎の外観”（大学の建物らしくないという印象・無機質・無味乾燥）に対して問題を指摘する場合が多かった。

ロビーに関して最も多く指摘された問題は、玄関ホール本来の役割（適切な人だまりができやすいなど）をあまり果たしていない、などの“場所の役割”であった。その次に多く指摘されたのは、“明るさ”（薄暗いなど）と“光の量と質”（光があまり入ってこないこと・光量が均質で落ちつく空間ではないこと）であり、“圧迫感・閉塞感”に対して問題を指摘する場合がそれに続いた。

食堂に関しては、食堂の入口が狭い、注文をする場所と会計を行う場所と食器を返す場所が近接している、などの食堂内の構造とそれに伴う動線の問題を指摘する場合が圧倒的に多かった（“食堂の構造、食堂内の動線”）。次に、食堂内のテーブルの配置、照明など

を問題として指摘する場合（“食堂内の種々の問題”）が多く、食堂がロビーより低い位置にあり、かつ学舎の端に位置していることを問題として指摘する場合（“学舎内での食堂の位置”）がそれに続いた。

表1-2　集計結果の概略（2）

中央階段　46名　C1	階段の構造（23）	
	階段の明るさ（4）	
	階段の設置位置（4）	
	階段の周辺の問題（4）	
	階段のデザイン（2）	
	階段の手すり（2）	
旧館4階にある採光用の窓と、旧館3・4階にある吹き抜け　39名　D1		
		吹き抜けがあることによる弊害（16）
		採光用の窓の問題（10）
		吹き抜けの機能（3）
		吹き抜けに対する印象（3）
旧館101教室横の広場　29名　F2		
	設置されているベンチとそこからの眺望の問題（14）	
	広場の位置（10）	
	広場の性質（4）	
	広場に対する印象（3）	
	広場の面積（1）	

表1-2に、中央階段、旧館4階にある採光用の窓と、旧館3・4階にある吹き抜け、旧館101教室横の広場についての集計結果の概略を示した。中央階段に対して最も多く指摘された問題は、階段が次の階への階段と直結していない・下から丸見えである・階段の傾斜が急で長く危険である、などの“階段の構造”に由来するものであった。その次に多く指摘されたのは、“階段の明るさ”（ロビーからの光で2階までは明るいがそれ以上の階になると外からの光はなくなりぼんやりとした蛍光灯の光のみになる）、“階段の設置位置”（この階段の存在が視界を遮りロビーの天井高を低く感じさせまた奥行きも狭く感じさせているなど）、“階段の周辺の問題”（中央階段の両側の通路が狭いなど）であった。

吹き抜けに対して最も多く指摘された問題は、廊下の面積を狭めている・この空間が人だまりのできる空間を邪魔している・通行の妨げにしかならない、などの“吹き抜けがあ

ることによる弊害”であった。その次に多く指摘されたのは“採光用の窓の問題”（天井にある採光用の窓が汚れていて光が入ってこないなど）であった。

旧館101教室横の広場に対して最も多く指摘された問題は、「背面」を支えるべき背もたれが備わっていない・ベンチが内向きであるため座ったとしても「より大きな空間への眺望」が望めない・休憩できるベンチが少ない、などの“設置されているベンチとそこからの眺望の問題”であった。その次に多く指摘されたのは“広場の位置”（建物の裏側にあたるので学生が寄りつかないなど）、“広場の性質”（ベンチの置いてある場所以外は段差もなく長居できないなど）であった。

表1-3　集計結果の概略（3）

101教室	26名	B1	教室内の印象（11）
			教室の天井高（10）
			教室の机と椅子（6）
			教室のドア（5）
			教室の黒板（4）
			座席の段差（2）
			教室外の印象（2）
			座席に対する教壇の位置（1）
			教室に設置されているテレビモニター（1）
			教室からの眺め（1）
			教室外への移動（1）
第3学舎旧館と新館に挟まれた中庭	26名	H1	印象（7）
			負の屋外空間（5）
			屋外からの中庭へのアクセス（5）
			学舎内からのアクセス（4）
			薄暗さ（4）
			中庭にある休憩所からの眺望（4）
			学舎内からの視覚的アクセス（2）
			面積（1）
			手入れ（1）
ロビーから旧館1階へ上がる左右の階段	21名	A2	
			階段が左右に分かれていることの意味（7）
			階段の構造・属性（4）
			旧館1階から2階へ上がる中央階段へのアクセス（2）

表1-3に、101教室、第3学舎旧館と新館に挟まれた中庭、ロビーから旧館1階へ上がる左右の階段についての集計結果の概略を示した。101教室に対して最も多く指摘された問題は、後方から前方を見たとき前に行くに連れて狭くなっているような感じを受け圧迫感を受ける・広いけれど暗い感じがする・先生の声が聞き取りにくい、などの“教室内の印象”に関するものであった。その次に多く指摘されたのは“教室の天井高”(教室の広さに対してあまりにも天井の高さが低すぎるなど)、“教室の机と椅子”(椅子と机の間隔が非常に狭いなど)であった。

第3学舎旧館と新館に挟まれた中庭に対して最も多く指摘された問題は、暗くてじめじめしてそうで人の気配もなくどこか陰気な感じがする・どことなく暗い感じがし閉鎖的に感じる、などの中庭に対する負の“印象”に関するものであった。その次に多く指摘されたのは“負の屋外空間”(とりとめなく広がって見え全くの負の空間になっているなど)、“屋外からの中庭へのアクセス”(駅から学舎へ向かう経路上にないなど)であった。

ロビーから旧館1階へ上がる左右の階段に対して最も多く指摘された問題は、事務室側の階段が使われていることは少なく101教室方向への流れが圧倒的に多い、などの“階段が左右に分かれていることの意味”であった。その次に多く指摘されたのは“階段の構造・属性”(暗すぎる・左側の階段が狭いなど)であった。

表1-4　集計結果の概略(4)

東側階段　17名　B2	階段の印象(7)	
	踊り場の窓とその周辺(6)	
	学舎内での階段の位置(3)	
	階段の幅(1)	
	東側階段の必要性(1)	
食堂、食品売場(かんしゃ堂)、自動販売機の周辺　16名　A3		
	食堂、かんしゃ堂、自動販売機が相互に近接していることによる混雑(5)	
	かんしゃ堂の面積(2)	
	食堂、かんしゃ堂の位置(2)	
学生控室(談話室)　14名　C4	部屋に対する印象(6)	
	ガラス張り(3)	
	部屋の構造(3)	
	部屋の位置(2)	
	部屋の机・椅子(1)	

表1-4に、東側階段、食堂、食品売場（かんしゃ堂）、自動販売機の周辺、学生控室（談話室）についての集計結果の概略を示した。東側階段に対して最も多く指摘された問題は、暗くて汚い・閉鎖的な印象・電気が暗く壁に囲われているため他から光が入りにくくひときわ暗い場所となっている、などの“階段の印象”に関するものであった。その次に多く指摘されたのは“踊り場の窓とその周辺”に関する問題（窓が小さいため冬や梅雨の季節には地味・暗い・寒いといった感じを受けるし夏の季節も風通しがよくなく空気が重いといった感じを受けるなど）であった。

食堂、かんしゃ堂、自動販売機の周辺に対して最も多く指摘された問題は、これらが空間的に近接していることによる混雑に関するものであった（“食堂、かんしゃ堂、自動販売機が相互に近接していることによる混雑”）。

学生控室（談話室）に対して最も多く指摘された問題は、なにか居心地の悪さを感じる・隅にありタバコの煙などがあるので空いていても入りにくい、などの“部屋に対する印象”に関するものであった。その次に多く指摘されたのは“ガラス張り”（大きな窓は一見開放性が高いように見えるが逆に廊下とのつながりが薄い閉鎖的な空間を作る原因になっているなど）と“部屋の構造”（教室のように四方八方が壁で囲まれており入口が一つしかないので気軽に入ることはできず実際特定の学生しか利用しないなど）であった。

表1-5　集計結果の概略（5）

旧館のエレベーター　13名　B3	エレベーター自体の問題（9）	
	エレベーターの乗降場所の問題（9）	
新館の階段　13名　B4	階段自体の問題（7）	
	採光の問題（4）	
	階段の設置（1）	
女子控室　10名　C2	トイレとの隣接（3）	
	部屋の明るさ（3）	
	部屋の構造（2）	
	部屋の机・椅子（2）	
	部屋の意味（1）	

表1-5に、旧館のエレベーター、新館の階段、女子控室についての集計結果の概略を示した。旧館のエレベーターに対して指摘された問題は、速度が遅い・小さい・古い、などの“エレベーター自体の問題”と、エレベーターのある場所は三方が壁に囲まれていて

圧迫感を覚える・設置箇所がロビーから明らかに遠い、などの“エレベーターの乗降場所の問題”であった。

新館の階段に対して最も多く指摘された問題は、照明があまりなく階段の床の色もグレーとあまり明るい感じがしない・階段の幅が狭い、などの“階段自体の問題”であった。その次に多く指摘されたのは“採光の問題”（もともと方角的に悪いのかそれとも窓が小さいのか窓から差し込む光の量が多いとは思えない）であった。

女子控室に対して最も多く指摘された問題は、トイレと隣接していることによる問題（“トイレとの隣接”）と、“部屋の明るさ”（窓からあまり光が入らず照明も薄暗いなど）であった。

表１-６　集計結果の概略（６）

第３学舎から図書館方面を結ぶ回廊	８名	Ｇ１	回廊に取り付けられた覆いの機能（３）	
			回廊に対する印象（２）	
			回廊の設置位置（１）	
第３学舎西側にある、慰霊碑周辺のスペース	８名	Ｋ１	印象（３）	
			旧館からのアクセス（１）	
			薄暗さ（１）	
旧館と新館を結ぶ通路	７名	Ｂ５	通路の構造に由来する問題（６）	
学生控室（読書室）	７名	Ｃ３	読書室の面積・ドア（３）	
			読書室の印象（２）	
			屋外への眺望（１）	
旧館101教室裏の出入口付近	６名	Ｆ１	印象（３）	
第３学舎西側にある扇形のスペース	４名	Ｉ１	スペースの構造（２）	
			印象（１）	
			眺望（１）	
第３学舎西側にあるアプローチ	２名	Ｊ１	印象（２）	

表１-６に、第３学舎から図書館方面を結ぶ回廊、第３学舎西側にある、慰霊碑周辺のスペース、旧館と新館を結ぶ通路、学生控室（読書室）、旧館101教室裏の出入口付近、第３学舎西側にある扇形のスペース、第３学舎西側にあるアプローチについての集計結果の概略を示した。第3学舎から図書館方面を結ぶ回廊に対して最も多く指摘された問題は、回廊に取り付けられた覆いがその役割を果たしていないという問題（“回廊に取り付けら

れた覆いの機能”）であった。その次に多く指摘されたのは“回廊に対する印象”（両端が壁によって覆い隠されているため息苦しい気分になるなど）であった。

第３学舎西側にある、慰霊碑周辺のスペースに対して最も多く指摘された問題は、人通りが少ない・少し寂しさを感じる・負の空間になっている、という、慰霊碑周辺のスペースに対する“印象”を問題にするものであった。

旧館と新館を結ぶ通路に対して指摘された問題は、通路が直角に折れているため曲がった先にあるものが見えない、などの“通路の構造に由来する問題”であった。

学生控室（読書室）に対して最も多く指摘された問題は、スペースが狭い・入口のドアが人が出入りするたびに音がするので不快、などの“読書室の面積・ドア”に関するものであった。

旧館101教室裏の出入口付近に対して指摘された問題は、非常に暗い感じがしてよくわからない空間、などの“印象”に関するものであった。

第３学舎西側にある扇形のスペースに対して最も多く指摘された問題は、通行人に何をしているのかが丸見え、などの“スペースの構造”に関するものであった。

第３学舎西側にあるアプローチに対して指摘された問題は、人通りは非常に少なく寂しい、などの“印象”に関するものであった。

２．２．３．集計結果の詳細

２．２．３．１．第３学舎旧館Ｂ１階

４つの場所（図２におけるＡ１からＡ４を参照）に対して問題が指摘された。

Ａ１.玄関ホール（ロビー）（55名）

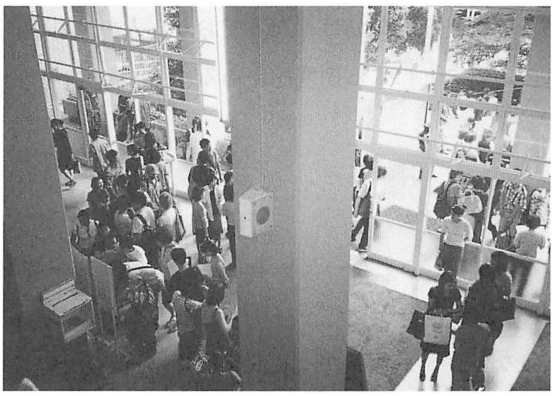

図７．玄関ホール（ロビー）（旧館１階から見たところ）

明るさ（10）
薄暗い。
掲示板を見るためには、階段に行くよりさらに左に行かなければならないし、なおかつ何となく暗いのであまり行く気になれない。

光の量と質（10）
玄関がガラス張りにもかかわらず、いっこうに光が入ってこない（経商学舎が道路を挟んで正面にあることによる日光の遮りと建物の向きの問題）。
ロビーの明かりが蛍光灯では、陰気なイメージである。
人工光があまりに少ないため、外よりもロビーがかなり暗くなってしまっている。
現在の光量ではロビーの広さに対応しきれていない。
均質な明かりであり、人を誘導するものもないので、落ち着きにくい空間となってしまっている。

壁・床・天井（3）
壁や床の色が暗い。
床のタイルが、より冷たい印象を与えてしまっている。
天井の高さと床の面積のバランスが悪い。

圧迫感・閉塞感（9）
正面が壁になっていて圧迫感がある。
4本の柱によって視界が遮られ、圧迫感が生じている。
ロビーの4箇所にある柱は、通行の妨げとなっており、人の流れが円滑になっていない。
屋外空間と遮断されていることによる閉塞感がある。

居心地（3）
長時間居辛い感じがする。
「中心」がない空間（一人でじっと待っているとき目をやる対象物がなく視線に落ち着きがなくなる）。
奥に入ればすぐに陰気なイメージが広がってしまっている。

場所の役割（25）
何もなく手入れがなされていない感じで通り道としての役割しか果たさない。
逆に昼休みの時間には、おしゃべりをするひとだまりが無理に立ち止まる場所になり、歩行路がはっきりせず、通り抜けの場所として機能しなくなる。
ベンチなどもなく一息つく場所もない。
公衆の集まる場所があまりない。
ただ無駄にスペースが広がっているだけだと感じる。
殺風景で休講情報を見るだけの場所になりがち。
ロビーから旧館１階へ上がる階段下のスペースには誰も寄らない。

バリア・フリー（1）
将来、車椅子の使用を余儀なくされる者が出た場合、裏に回らなければならない。

ロビーの集計を行っている際、３つの問題点が見いだされた。１つめはロビーの“広さ”に関して、内容的に相互に矛盾する理由があげられていたということである。つまりロビーが狭いことを理由として取り上げた人と、ロビーのただっ広さを理由として取り上げた人が半数ずつ存在した、ということである。ここでは内容的に相互に矛盾する理由をあげている人が半数ずつであったことから、上記の集計の結果には入れ込まなかった。

2つめはロビーという“場所の役割”に関して、内容的に相互に矛盾する理由があげられていたということである。つまり待ち合わせがしづらいことを理由として取り上げた人と、待ち合わせ程度にしか活用されていないことを理由として取り上げた人が存在した、ということである。ただしこの場合には相対的に後者の理由をあげる人の方が多かったことから、後者を、問題として指摘された理由として集計した。

３つめは、パタン・ランゲージの過剰適用の問題である。この問題はロビーに限らず、多くの場所において見られた。ロビーの場合を例にとると、ロビーの入口の窓ガラスに対して「小割の窓ガラス一つ一つの面積が少々広いように感じる」としたもの（パタン・ランゲージ239.小割の窓ガラスの過剰適用）がそれにあたる。以下の集計においても、このようなパタン・ランゲージの過剰適用に基づく理由は、集計に含めていない。

Ａ２.ロビーから旧館１階へ上がる左右の階段（21名）

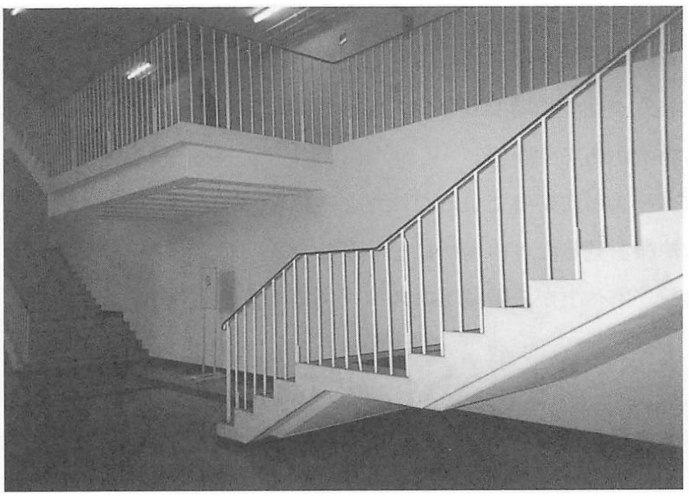

図８．ロビーから旧館1階へ上がる左右の階段（手前に見えているのは社会学部事務室へ上がる、右側の階段）

階段が左右に分かれていることの意味（７）

利用者の極端に少ない階段（社会学部事務室方面）と極端に多い階段（旧館１階101教室方面）が一箇所で分かれていることによる混雑。

事務室側の階段が使われていることは少なく、101教室の方向への流れが圧倒的に多い。

101教室からロビーに降りる階段は、学生がたまってなかなか思い通りに進むことができない（反対側にも階段があるが（101教室から出た場合には）遠く感じるためかあまり利用されない）。

階段の構造・属性（４）

右側の階段は事務室へと我々を導くだけで、そのまま上階へ行くことのできる階段が連結して設置されていない。

事務室側の階段の直下にはかなりのスペースができている。

暗すぎる。

左側の階段が狭い。

旧館１階から２階へ上がる中央階段へのアクセス（２）

ロビーから旧館１階を通り、中央階段へ進む道に無駄が存在している。
ロビーから旧館１階を通り、中央階段へ進む道が狭い。

A３.食堂、食品売場（かんしゃ堂）、自動販売機の周辺（16名）

図９．食堂（正面）、かんしゃ堂（左側）、自動販売機（右側）

食堂、かんしゃ堂、自動販売機が相互に近接していることによる混雑（５）
昼食時、かんしゃ堂の外に並ぶ学生や、食堂に向かう学生、自動販売機で飲み物を買う学生がごっちゃになり、とても混み合っている。

かんしゃ堂の面積（２）
かんしゃ堂が狭いので長蛇の列ができる。また食堂の前でもあり、邪魔になる。

食堂、かんしゃ堂の位置（２）
かんしゃ堂と食堂がなぜかロビーよりも数段下にあり、しかも極端に狭くなっている。
ロビーを入った右側の食堂の方は、外からの光が入っているが、袋小路感が強い。かんしゃ堂も同じで窮屈感がある。

A4.食堂（46名）

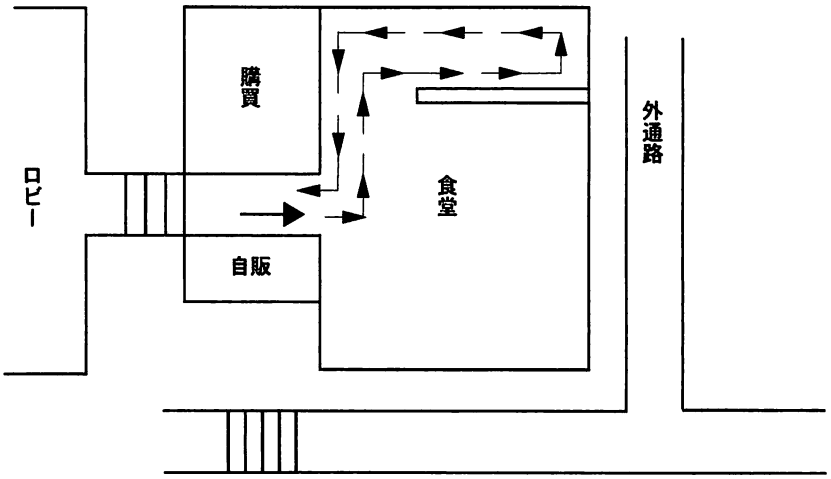

図10．食堂周辺の模式図（学生による）（図中の矢印は入口周辺の食堂利用者の動線を表す）

学舎内での食堂の位置（11）

北側に面しており独立していて親しみがわきにくい。

ロビーより低いところにあるので暗くなっている。

日当たりが極めて悪く「暗い食堂」というイメージがある。

突き当たりに位置していて人の通り道にない（それにより、空間的な暗さと閉塞感を感じる）。

食堂へのアクセス（2）

学舎の中からしか入れないことに不便さを感じる。

食堂からの眺望（4）

周辺が通路に覆われていて窓からの見晴らしが良くない。

食堂の構造、食堂内の動線（36）

入口が狭く、中の様子が見にくい。

座席が少ないので常に混んでいる。

レジが一つしかなく会計がスムーズにいかない。

注文をする場所と清算をする場所が近くにありすぎる。
食器の返却口と食事の取り出し口、及び会計の場所が近く、一箇所に人が集まり行動しにくい。
お金を払う場所と食堂の入口が近接している。
狭いので昼休みはとても混み合う。
部屋のつくりが全体的に四角なので暖かみがない。
中に入るとガラス張りで見せ物のように感じる。
食堂の外にある階段は、食堂よりも高い位置にあるので、上から外の人に見られてしまう。

食堂の機能（8）
食事をするだけの空間でありそれ以外の機能を果たしていない。
メニューが他の学舎の食堂より少ない。
他人との交流がしにくい。
閉まる時間が早いので利用しにくい。

食堂内の種々の問題（13）
正方形のテーブルではあまりリラックスできない。
雑然と配置されたテーブル。
机の配置も、入口から見てふさぐように真横に並んで置かれているため、非常に入りづらいという印象を与える。
テーブルはいくつもつながって設置してあり、隣の人との距離が近すぎる。
机は6～8人用で、いくつも連なっている状態であるため、隣の空いた席を荷物置きにしてしまう傾向があり、たくさんの無駄な空間が生まれやすくなってしまう。
古びた感じで地味。
厨房の辺りが妙に暗い。
照明が暗い。
光や照明が均質である（とらえどころのない気持ちにさせる）。
机や椅子がとても汚い。

食堂の集計を行っている際、問題点が一つ見いだされた。それは食堂の“広さ”に関して、内容的に相互に矛盾する理由があげられていたということである。つまり食堂が狭い

ことを理由として取り上げた人と、食堂のただっ広さを理由として取り上げた人が存在した、ということである。ただしこの場合には相対的に前者の理由をあげる人の方が多かったことから、前者を、問題として指摘された理由として集計した。

２．２．３．２．第３学舎旧館１階、および新館１階

５つの場所（図３におけるＢ１からＢ５を参照）に対して問題が指摘された。

Ｂ１.101教室（26名）

図11．101教室（向かって右側に教室の出入口がある）

教室の天井高（10）

教壇の天井が座席よりもやや高いために、座席の天井の低さが強調されてしまう。そのため先生が発した言葉が、座席にいると実際よりも聞き取りにくく感じてしまう。

天井の高さが場所によって変わることから、声の反射が一定ではなく、声が聞き取りにくいのではないかと思う。

教室の広さに対してあまりにも天井の高さが低すぎる。

座席に対する教壇の位置（１）

座席の位置と比べて教壇の位置が高くなっているために声が床に反射しにくい

(つまり聞き取りにくくなる)。

座席の段差（２）

座席の段差がほとんどないので、先生を見ながら授業を受けるのが難しく、また黒板が非

常に見えにくい。

教室のドア（5）
教室の入口中央にある扉は、開閉時に大きな金属音が鳴り響く。また、扉が開いたとき、扉の後ろのスペースが無駄になる。
教室の広さに対して出入口が小さい。
教室の側面に扉があるため、出入り時の雑音が前の方まで響きやすい。
側面に扉があることで、後方で講義を受けているものにとっては視界に人影が入り、集中力がそがれる。

教室の机と椅子（6）
椅子と机の間隔が非常に狭い。
椅子の角度が中途半端。
椅子と椅子の間隔が狭い。
座席の前後の間隔が狭すぎる。
３人掛けの机なので、一人あたりの机の面積が狭く、使いづらい。

教室の黒板（4）
黒板も小さく、後方部分からはとても見にくい。

教室に設置されているテレビモニター（1）
天井に設置されたテレビモニターは、台数も少なく、位置も向きも悪く、この大きな教室だと、見えないまたは見にくいポイントが出てくる。

教室からの眺め（1）
窓から外の風景があまり見えず、見えても人の頭ぐらいである。

教室内の印象（11）
後方から前方を見たとき、前に行くに連れて狭くなっているような感じを受け圧迫感を受ける。
広いけれど暗い感じがする。

学生のしゃべり声がなぜか響いて聞こえる。
先生の声が聞き取りにくい。
受講者数の多い授業ともなると、千人近い人間が密集していて混雑しており、窮屈な思いがし、決して落ち着かない。

教室外の印象（2）
ロビーから101教室を見上げると、入口付近が薄暗い。
一番後ろの席にあるドアの向こう側には、たいてい話をしている人がいるので、一番後ろに座ったときなどは、後ろから話し声が聞こえたりして落ち着かない。

教室外への移動（1）
講義が終わり退席し始めると、101教室前の通路に人の群れができ、101教室使用者以外の通行者の通行の妨げになる。

101教室の集計を行っている際、問題点が一つ見いだされた。それは101教室の“広さ”に関して、内容的に相互に矛盾する理由があげられていたということである。つまり101教室が狭いことを理由として取り上げた人と、101教室の広さに付随する問題点を理由として取り上げた人が存在した、ということである。ただしこの場合には相対的に後者の理由をあげる人の方が多かったことから、後者を、問題として指摘された理由として集計した。

B2．東側階段（17名）

図12．東側階段（旧館1階上り口部分）

学舎内での階段の位置（3）

学舎の隅に存在している。

１階の男子トイレが視界に入る。

階段の印象（7）

暗くて汚い。

閉鎖的な印象。

外部とのつながりをあまり感じさせることがない。

電気が暗く壁に囲われているため、他から光が入りにくく、ひときわ暗い場所となっている。

照明があまりなく、階段の床の色もグレーと、あまり明るい感じがしない。

どこにでもあるごく普通の「く」の字型の階段であるが、一階から最上階までそれを利用して上がるのは、かなり疲れそうな印象を受ける。

踊り場の窓とその周辺（6）

１階と２階の踊り場の窓は特に小さい。

踊り場にある棚が低くその向こうは吹き抜けなので少し危ない。

窓が小さいため、冬や梅雨の季節には地味・暗い・寒いといった感じを受けるし、夏の季節も風通しがよくなく、空気が重いといった感じを受ける。

踊り場の両側に細長い窓が付いているが、その間にはベージュがかった白い壁がぬり壁のようにそびえ立っていて、圧迫感を感じる。

階段の幅（1）

階段の幅が狭いので、休み時間などは混雑する。

東側階段の必要性（1）

多くの学生は中央階段を利用するので、この階段は必要ではない。

B3．旧館のエレベーター（13名）

図13．旧館のエレベーター（旧館2階の乗降場所）（左手に壁がある）

エレベーター自体の問題（9）

きしむ。

防犯上、今の鏡（エレベーター内部にある）だけでは物足りない。

速度が遅い。

小さい。

古い。

エレベーターの乗降場所の問題（9）

エレベーターの乗降場所に壁があるために、新館の方へ行くのに旧館の方向へ一度進んでから周り込まなければならない。

エレベーターのある場所は三方が壁に囲まれていて圧迫感を覚える。

エレベーターのある場所には窓があるが、あまりに小さくて本来の役目を果たしていない。

本当に隅の暗がりにエレベーターがある。

設置箇所がロビーから明らかに遠い。

B４．新館の階段（13名）

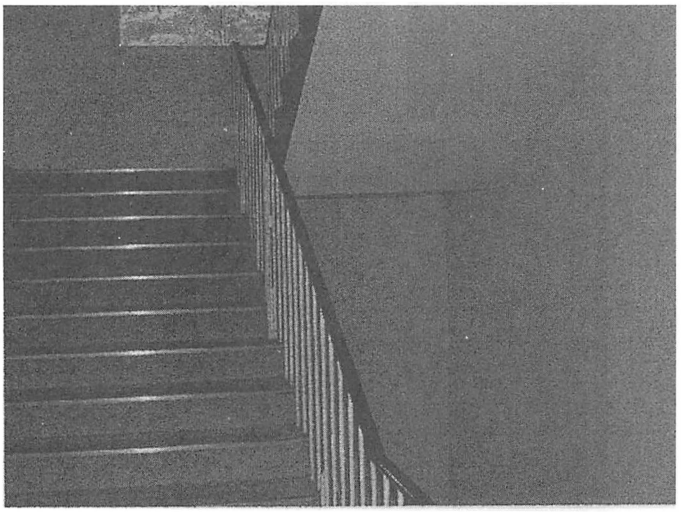

図14．新館の階段（新館１階上り口）（図の上方に見えているのが窓）

採光の問題（４）

もともと方角的に悪いのか、それとも窓が小さいからなのか、窓から差し込む光の量が多いとは思えない（暗い）。

階段自体の問題（７）

場所が場所なら犯罪が起こりそうなほど暗く狭い。

照明があまりなく、階段の床の色もグレーと、あまり明るい感じがしない。

階段の幅が狭い。

階段の設置（１）

一箇所しかない（明らかに少ないのではないか）。

B５．旧館と新館を結ぶ通路（７名）

通路の構造に由来する問題（６）

通路が直角に折れているため、曲がった先にあるものが見えない。

狭く見通しが悪いので、角のところで衝突が起こったり、荷物の運搬車が通れないといっ

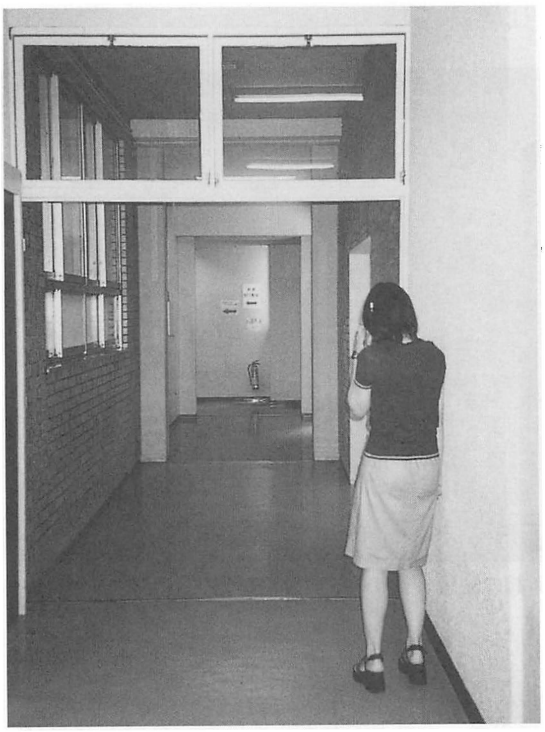

図15. 旧館と新館を結ぶ通路（突き当たりを左、さらに右へ曲がると新館）

た問題がよく発生している。

通路のすみ切りが生み出す広角性を考慮に入れていない。

２.２.３.３.第３学舎旧館２階、および新館２階

４つの場所（図４におけるＣ１からＣ４を参照）に対して問題が指摘された。

Ｃ１.中央階段（46名）

階段の構造（23）

昇る方向が同じなので、上階へ行くためには少し廊下を歩かねばならない。

階段が、次の階への階段と直結していない。

学舎の真ん中ぶちぬきで階段がスペースを占めているため、大変無駄な構造に見える。

１階から４階まで吹き抜け構造になっており、いつ、ものが落ちてきてもおかしくないよ

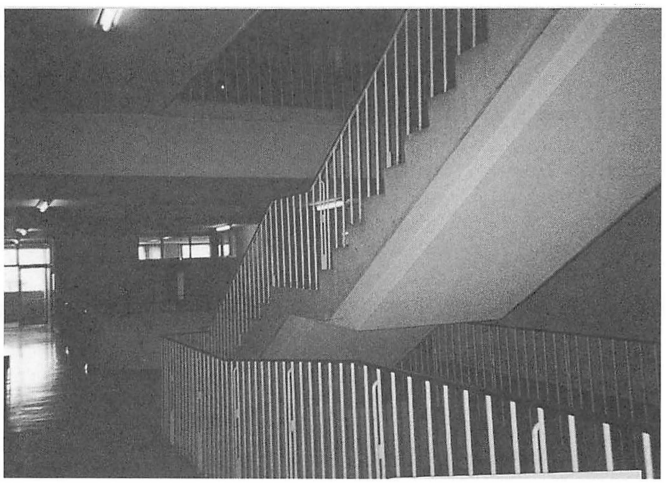

図16. 中央階段

うな危険な状況である。
下から丸見えである。
階段の傾斜が急で長く、危険である。
階段の幅が狭い。
階段の周りにトイレや大教室の出入口があるため、階段の近くに人がたまりやすい。
いつも混雑していて、なかなか前に進めない。
二階から四階までの階段の上りきったところはすぐ壁になっている。

階段の明るさ（4）
ロビーからの光で2階までは明るいが、それ以上の階になると、外からの光はなくなり、ぼんやりとした蛍光灯の光のみになる。

階段の設置位置（4）
この階段の存在が視界を遮りロビーの天井高を低く感じさせ、また奥行きも狭く感じさせている。
中央階段があることによって、フロア全体が、くつろいだり気楽にたたずんだりすることが不可能になっている。

階段の周辺の問題（4）
例えば3階まで上がって、折り返して308教室などに行こうとしたとき、4段くらい下がる階段（中央階段横）があるが、そこが下がっている理由が分からない。
中央階段の両側の通路が狭い。

階段のデザイン（2）
色や形などデザインの面から見ても事務的な印象しか受けず、よい空間とは言いがたい。
階段と廊下との境界が明確でない。

階段の手すり（2）
横の手すりが、普通の身長の人の腰程度の高さしかないし、格子になっていて安定感がない。
階段と手すりの間にある隙間が大きい。

中央階段の集計を行っている際、問題点が一つ見いだされた。それは中央階段の“幅”に関して、内容的に相互に矛盾する理由があげられていたということである。つまり中央階段の幅が狭いことを理由として取り上げた人と、横幅が広々とし過ぎていることを理由として取り上げた人が存在した、ということである。ただしこの場合には相対的に前者の理由をあげる人の方が多かったことから、前者を、問題として指摘された理由として集計した。

C2.女子控室（10名）

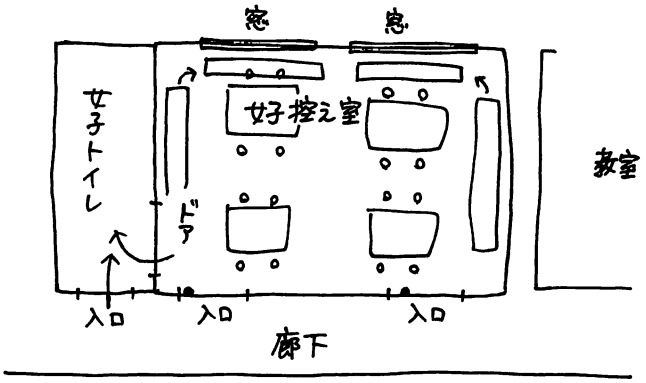

図17. 女子控室（図は学生による）

トイレとの隣接（3）
女子控室とトイレがきちんとしきりがなされていない。
女子控室の隣にあるトイレには廊下側にも入口があり、2方向から人が入ってきて困ることがある。

部屋の構造（2）
そんなに広くない女子控室に、3つもドアがある。
中の様子を外から見ることができない。

部屋の机・椅子（2）
中に置いてあるテーブルが大きく、また、その数が少ない。
ドアを開けると、向かいの壁に置いてある椅子に座っている人たちの注目を浴びてしまう。

部屋の明るさ（3）
中には窓があるが、それほど明るい印象は受けない。
暗い。
窓からあまり光が入らず、照明も薄暗い。

部屋の意味（1）
女子だけに控室があるのはおかしい。

C3．学生控室（読書室）（7名）

屋外への眺望（1）
屋外への眺望がない。

読書室の印象（2）
物音がほとんどせず閉ざされた空間である。
とても暗い（居るだけで気分が滅入ってくるし、なんだか取り残されたような気分になる）。

図18. 学生控室（読書室）

読書室の面積・ドア（3）

スペースが狭い。

利用学生が多い割に狭く、机数が少ない。

入口のドアが、人が出入りするたびに音がするので不快。

C4．学生控室（談話室）（14名）

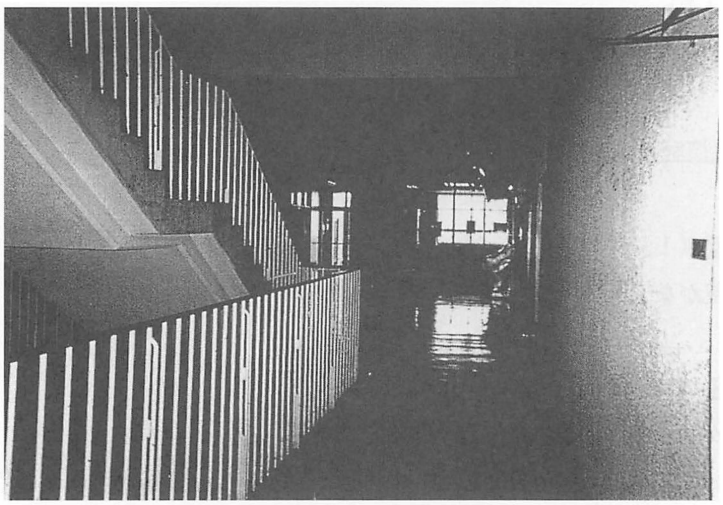

図19. 学生控室（談話室）（正面のガラス張りの部屋）

ガラス張り（3）
ガラス張りになっているため、一般の学生には入りづらい（特定のグループのテリトリーとなっている）。
大きな窓は一見開放性が高いように見えるが、逆に廊下とのつながりが薄い閉鎖的な空間を作る原因になっている。

部屋の構造（3）
壁に囲まれていて閉鎖的であるが故に、決して気軽に入ることが許されていない。
非常に天井が低く作られており、よって個々人の水平方向の個人空間が狭くなり、中にいる人に親密さを要求する。
教室のように四方八方が壁で囲まれており、入口が一つしかないので、気軽に入ることはできず、実際、特定の学生しか利用しない。

部屋に対する印象（6）
なにか居心地の悪さを感じる。
隅にあり、タバコの煙などがあるので、空いていても入りにくい。

部屋の位置（2）
多数の学生が利用する階段（中央階段）から最も離れた位置にある。

部屋の机・椅子（1）
机と椅子の配置に問題があるのではないか？

2．2．3．4．第3学舎旧館3階、および新館3階

旧館4階にある採光用の窓と、旧館3・4階にある吹き抜け（図5と6におけるD1を参照）に対して問題が指摘された。

D1．旧館4階にある採光用の窓と、旧館3・4階にある吹き抜け（39名）

吹き抜けがあることによる弊害（16）
廊下の面積を狭めている。

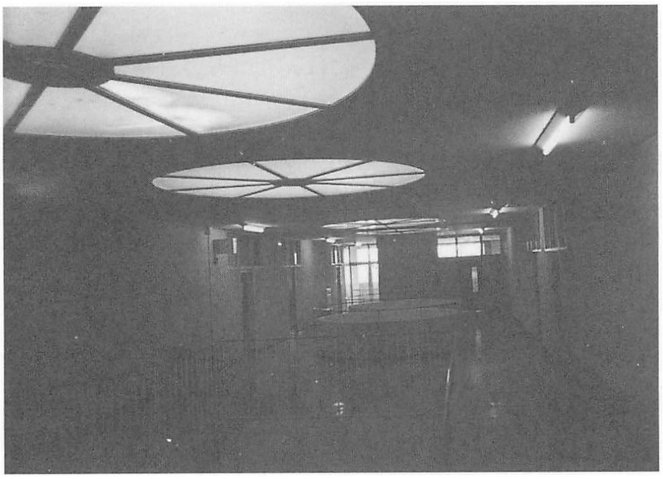

図20. 旧館4階にある採光用の窓と2つの吹き抜け

スペースが無駄になっている。
フロアの中心部にこのような吹き抜けがあることによって「中心部の共域」をなくしてしまっている（ただただ通過地点となっているだけである）。
この空間が、人だまりのできる空間を邪魔している。
通行の妨げにしかならない。
吹き抜けの向かいの教室に行くときはそれを避けるように遠回りして行かなくてはならない（狭くて通りにくい）。

吹き抜けの機能（3）
スペースを取っている割に吹き抜けの特長（開放感・明るさ）を発揮していない。

吹き抜けに対する印象（3）
四角い建物の中に丸い空間があるというのは、見た目にもバランスが悪い。
何かしら圧迫感があり、障害物としての印象が強い。
何か上の人に見られている感じを受けるし、もし何かのはずみで物が落ちてくるととても危険であるし、誤って人が落ちる可能性もある。

採光用の窓の問題（10）
天井のガラスから差し込む光が電灯の光よりも弱い。
天井にある採光用の窓が汚れていて光が入ってこない。
天井から光を採り入れるためであるならくもりガラスであるのは問題。

上記以外には、学舎内部において次のようなことが問題として指摘されていた。

2．2．3．5．旧館全体に関して

・各フロアーの廊下（14名）

廊下の構造
余計な出っ張りが多く存在し、ますます陰気で狭い感じを与えている。
101や201教室前の廊下（の幅）が狭い。
壁の色も古さを強調している。
極端に窓が少ない。
廊下の両側は、教室の木のドアと汚い壁に光を遮られている。

暗さ
何よりも照明が暗い。

印象
簡素で無機質。
通り過ぎる以外、使い方がない。

2．2．3．6．新館全体に関して

・各フロアーの廊下（9名）

窓・電灯の少なさ
圧倒的に明かりが少ない。

電灯が少ない。

廊下の両側に教室があるため、窓が少なく、暗くて陰気な感じがする。

狭さ

旧館と比べ通路が狭く、人が二人並んで歩ける程度の幅である。

廊下のじゅうたん

床のじゅうたんの色が濃い灰色であることも、この通路を薄暗くしている原因である。

２．２．３．７．第３学舎正面玄関付近

学舎正面玄関（図１におけるＥ１を参照）に対して問題が指摘された。

Ｅ１．学舎正面玄関（68名）

図21．学舎正面玄関（図の手前に道路、右手に、道路から上がってくる階段がある）

入口のドア（８）

入口のドアは周囲のガラス壁にとけ込み、わかりにくい。さらにそれ自体の大きさも不足しているため入るのをためらわれる。

開いているドアしかなければそこからしか出入りしないのでいつも混雑している。

最も利用度が高いにもかかわらず、ドアが二つしかない。

出入口が狭い（出入口が狭いというだけで建物の中と外に区切りができてしまうように感じられる）。

入口のドア付近の屋外部分（2）
入口手前にある「柱」に問題がある（入口から入る前に「何となく」建物の中に入ってしまった気になってしまう）。
雨の日においては、屋外の横長の屋根部分は、傘の開閉で混み合い、非常に出入りしにくい。また、その屋外の屋根部分が前に出ていて圧迫感がある。

学舎入口周辺のアイデンティティ（3）
学舎の入口周辺が、外部と学舎内の境界として曖昧。
入口付近には、境界を意識させるような目印がほとんどない。

学舎正面玄関前の空間（3）
学舎の前に人が集まることのできる庭がない。
無駄にくねくね曲がっているような気がする。
正面玄関の前の空間は負の空間になっており、空間は道路で遮られ、前に大きな広がりを見渡せるような感じでもない。

学舎正面玄関の意味（2）
正面玄関が、学生にとって正面から出入りをするという役割を果たす頻度が低い（大多数は新館の裏の出入口を利用している）。

学舎正面玄関の印象（4）
学舎の入口へ上る階段と、車が行き交う一般道路とが間近で接しており、入口へ向かうときは常に車の存在を気にしなければならず、漠然とした圧迫感を感じる。
光を遮ったところに位置しているので、外と、校舎の玄関付近や玄関から入ったところを比較してみると、外の方が明るい。
何となく暗い。
植え込みと数段の階段、ベンチなどでできているが、入り組んでいて明るい感じがしない。

学舎正面玄関前の階段の構造（5）
階段が多く、また段差が浅いので危ない。
道路へ向かうときや道路から上がってくるときに、階段が二手に分かれていると、歩行経路が立てにくい。
道路側に対して木があるために、階段の曲がり角付近に領域性が生まれてしまい、たむろする学生が多く、非常に不快で、階段を上り下りする際にも邪魔で、周囲から見ても決して心地よい光景ではない。
右側の階段（ベンチのある側）を曲がるときに、反対側から来る人にぶつかってしまいそうになるときがある。

学舎正面玄関前の階段に対する印象（1）
この階段で、他の多くのものとのつながりが断たれてしまっているように思う。

学舎正面玄関前の階段の利用の仕方（11）
確かに段差も低く、集まりやすい場所だが、学生の数に対してあまりに狭すぎるし、あまり大勢が集まると通行の邪魔になってくる。

学舎正面玄関前の道路（7）
道路が走っていることによって、近い中心部が心理的に遠く感じる。
他学部との間には一般車道が横たわっていて、まるで他学部とは関係のないような建物である。
道路の利用者のほとんどが社会学部生であるにもかかわらず、歩道は経済・商学部側にある（正門のところを右折して学舎に上がってくる学生は、歩道を利用せず車道を歩くことになってしまう）。
経・商方面へ道路を横断する際、右側に植え込みがあるので車が来ているのかどうか確認しにくい。また、車からも同様に歩行者の存在に気づきにくい。
非常に車が多く通る道路なので、事故がいつ起こってもおかしくない状況である。

大学の外にある、学舎正面玄関（17）
学舎に来る際、正門をくぐらないので、あたかも学舎が大学の敷地内ではないかのような印象を受ける。

「各単位を明示する入口の役目を果たす入口」が存在しないため、他学部に比べて活気がなく、独立した雰囲気を出し、関西大学としての一つの単位一つの学部としての明瞭なアイデンティティを持たない。

学舎の外観（8）

他の学舎とは違って、大学の建物らしくない印象を受ける（強いていえば病院に似たような作りであるように感じる）。

建物を正面から見たとき、すごく見た目が暗い感じになっている。それにはまず、緑（草や木）の存在が問題である。社会学部の場合、緑が建物を覆い、入口より周辺が非常に狭くまた暗い感じになってしまっている。

殺伐とした、堅苦しいイメージしかない。

今の社会学部の壁は、何となく自然の“みどり”にとけ込まない気がする。

正門や図書館、近隣の学舎に比べ、かなり冷たい印象を抱いてしまう。

外見的に新しくない。

少し地味すぎるのではないかと思います。それは建物の形や壁の材質の違いから感じられたと思います。

無機質であり、また無味乾燥な建物である。

2．2．3．8．第3学舎旧館101教室横の外部空間

2つの場所（図1におけるF1とF2を参照）に対して問題が指摘された。

F1．旧館101教室裏の出入口付近（6名）

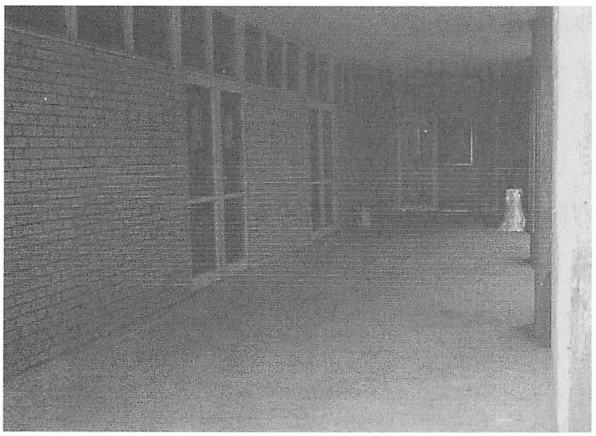

図22．旧館101教室裏の出入口付近
（図の左側が101教室の一番後ろ）

印象（3）

非常に暗い感じがしてよくわからない空間。

木々に囲まれた風景（学舎南側）の中、この一角だけが異質。

101教室と男子トイレの間にある玄関（光の当たらない陰気な場所である）は人通りが少なく、出入口という重要な場所であるだけに、仕方なくこの玄関を使っている。

F2．旧館101教室横の広場（29名）

図23．旧館101教室横の広場（図の右側に101教室、図の左側、手前、正面奥に、それぞれベンチが設置されている）

設置されているベンチとそこからの眺望の問題（14）

背後が守られていないため、ベンチに腰掛けたとしても、背後の道路を歩く人から、ベンチに座っている人の頭が見える。そのため落ち着かない。

学舎裏の庭には何脚かのベンチがあるが、これには「背面」を支えるべき背もたれが備わっていない。

ベンチが内向きであるため、座ったとしても「より大きな空間への眺望」が望めない。

目前の空間の先に、より大きな空間が開けてはいるが、少し眺めるだけですぐに飽きてしまう。

休憩できるベンチが少ない。

広場の面積（1）
全体的なスペースが狭い。

広場の位置（10）
建物の裏側にあたるので、学生が寄りつかない。
学舎の横にただあるだけであり、学舎に囲まれていない（そのためあまり利用されない）。
通過点にすらならないので、人が集まらない。

広場に対する印象（3）
暇なときに利用する学生はほとんどいない。
ただでさえあまり広くないのに、そこを樹木により取り囲むことで、どことなくさびしく閉鎖的な雰囲気になってしまっている。

広場の性質（4）
ベンチの置いてある場所以外は段差もなく、長居できない。
共有的すぎてプライベートな空間にしにくい。
直射日光を受け暑い。
学舎内からそのスペースを見ることができない。

旧館101教室横の広場の集計を行っている際、問題点が一つ見いだされた。それは広場の“広さ”に関して、内容的に相互に矛盾する理由があげられていたということである。つまり広場が狭いことを理由として取り上げた人と、広場が広いのでこの空間が有効に利用されないことを理由として取り上げた人が存在した、ということである。ただしこの場合には相対的に前者の理由をあげる人の方が多かったことから、前者を、問題として指摘された理由として集計した。

2．2．3．9．第3学舎から図書館方面を結ぶ回廊

第3学舎から図書館方面を結ぶ回廊（図1におけるG1を参照）に対して問題が指摘された。

G1. 第３学舎から図書館方面を結ぶ回廊（８名）

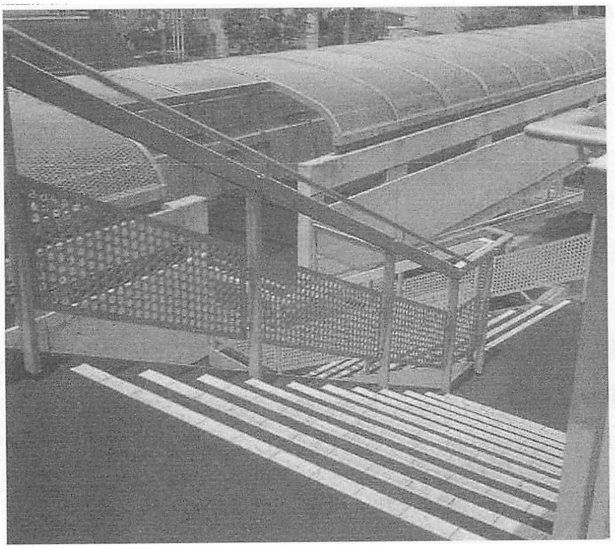

図24. 学舎から図書館方面を結ぶ回廊

回廊に取り付けられた覆いの機能（３）
覆いの役割を果たしていない。

回廊の設置位置（１）
旧館の２階からは階段を降りればつながっているが、１階からはつながっていない（いったん学舎の外に出て食堂の横にある階段を上がらなければならない）。

回廊に対する印象（２）
両端が壁によって覆い隠されているため息苦しい気分になる。
意味もなく視界を遮られているような気がする。

２．２．３．10. 第３学舎旧館と新館に挟まれた中庭

第３学舎旧館と新館に挟まれた中庭（図１におけるＨ１を参照）に対して問題が指摘された。

H1．第3学舎旧館と新館に挟まれた中庭（26名）

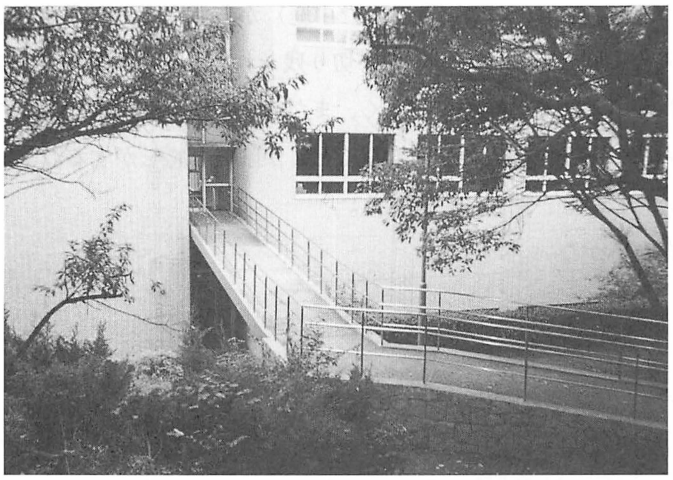

図25．新館2階から中庭方面へのアクセス通路（図の左側が中庭になっているため、このアクセス通路を使って直接中庭に行くことはできない。）

学舎内からのアクセス（4）

雑木林のまま放置された空間を、学舎と道で囲い込み、無理矢理中庭にしておきながら、建物内からそこへアクセスする手段が全くない。

旧館から直接行き来できない。

庭に出やすい出入口がない。

負の屋外空間（5）

屋内と屋外に曖昧な領域がない。

パタン・ランゲージ（106　正の屋外空間や、それに関連する105　南向きの屋外）にならうと、この庭は居心地が悪い（建物の間に単に取り残された屋外空間はたいてい利用されない）。

とりとめなく広がって見え、全くの負の空間になっている。

学舎内からの視覚的アクセス（2）

学舎からもあまり見えない。

女子控室やその他の、庭に面している場所からしか見ることができない。

印象（7）

パタン・ランゲージ（115　いきいきとした中庭）から考えると、学舎と遊歩道の間には緑が見えるものの、庭とはいいがたく山が切り残されている。雨の日や夕方は雑草のような木々に囲まれている山で景観的に寂しく、また窓を開ければ虫におおわれそう。

暗くてじめじめしてそうで、人の気配もなくどこか陰気な感じがする。

どことなく暗い感じがし、閉鎖的に感じる。

とりあえず、存在感がない。

面積（1）

スペースが狭い。

薄暗さ（4）

周りを竹などの樹木に覆われ、光が差し込まず薄暗い。

手入れ（1）

手入れもされておらず、草木が伸び放題。

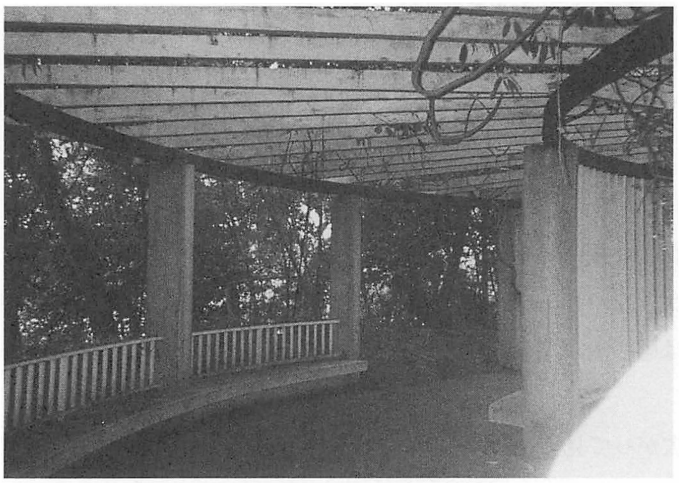

図26．中庭にある休憩所からの眺望

中庭にある休憩所からの眺望（4）

木々に囲まれていて見晴らしが悪く、人通りが少ないため、人間活動を眺めることができ

ない。
ベンチに座ると休憩所の中心を向くようになっており、前方の視界が開けておらず閉鎖的で圧迫感がある。

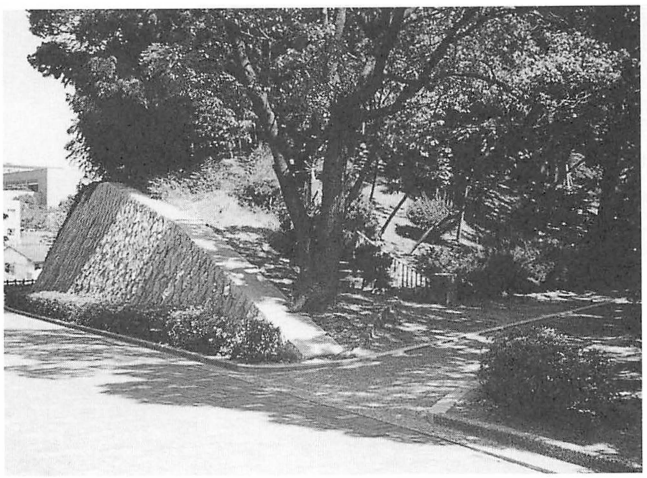

図27．屋外からの中庭へのアクセス
（学舎西側にあるアプローチから撮影されたもの）

屋外からの中庭へのアクセス（5）
どのようにして行くかも分からない人が多いはず。
そこへ到達するために使用する経路は基本的に一本しかなく通り抜けはできない。
駅から学舎へ向かう経路上にない。

2．2．3．11．第3学舎西側にある扇形のスペース

第3学舎西側にある扇形のスペース（図1におけるI1を参照）に対して問題が指摘された。

I1．第3学舎西側にある扇形のスペース（4名）

スペースの構造（2）
ベンチが数個置かれた扇形のスペースがある。そのすぐ後ろには鉄柵で隔てられた崖のようになっておりその下には道路が見え恐怖心をあおる。

図28．学舎西側にある扇形のスペース

通行人に何をしているかが丸見え。

印象（１）
淋しい雰囲気を与える。

眺望（１）
木がうっそうとしていて眺望が悪い。

２．２．３．12．第３学舎西側にあるアプローチ

第３学舎西側にあるアプローチ（図１におけるJ１を参照）に対して問題が指摘された。

J１．第３学舎西側にあるアプローチ（２名）

図29．学舎西側にあるアプローチ（進行方向が図書館方面）

印象（2）
人通りは非常に少なく、寂しい。更に夕暮れに通ったので薄暗く、不安感を感じる。

2．2．3．13．第3学舎新館西側にある、慰霊碑周辺のスペース

第3学舎新館西側にある、慰霊碑周辺のスペース（図1におけるK1を参照）に対して問題が指摘された。

K1．第3学舎西側にある、慰霊碑周辺のスペース（8名）

図30．慰霊碑周辺のスペース（右手に見える建物は新館）

印象（3）
人通りが少ない。
少し寂しさを感じる。
負の空間になっている。

旧館からのアクセス（1）
学舎の入口から遠い。

薄暗さ（1）
日当たりが悪い。

補足．環境心理学の講義について

2000年度環境心理学（前期：3年次以上配当科目）のレポート課題として「社会学部学舎改善案」の提出をもとめた。講義の日程と内容は以下のとおりである。講義の最初のアンケートで、色彩デザインに興味をもっている学生がおおかったので、色彩デザインに時間をさいたが、応用的なところにいくまでおもったより時間がかかってしまった。

4月6日	講義のすすめかた・環境心理学とはなにか
4月13日	アレグザンダーのパタン・ランゲージについて
4月20日	色彩の基礎と心理効果1　色彩の表示方法
4月27日	色彩の基礎と心理効果2　色彩知覚のしくみ
5月11日	色彩の基礎と心理効果3　色彩の心理効果
5月18日	色彩の基礎と心理効果4　配色の原理と技法
6月1日	プロクセミクスと領域性1　プロクセミクス
6月8日	プロクセミクスと領域性2　空間と人間関係
6月15日	プロクセミクスと領域性3　集住のなわばり学
6月22日	プロクセミクスと領域性4　まもりやすい空間
6月29日	みて移動する空間のデザイン1　景観と移動
7月6日	みて移動する空間のデザイン2　認知地図＋環境の色彩デザイン
7月27日	前期末試験・レポート提出締め切り

講義のおおよその内容をしめすために重要事項の一覧を下にしめす。

1．環境心理学とは

環境心理学の歴史と関連分野、S-R心理学と文化ループ、環境心理学の古典（書名とおよその内容）

2．アレグザンダーのパタン・ランゲージについて

近代建築を代表する建築家とグループ、近代建築批判、問題解決のいとなみとしてのデザインと制約条件、伝統の方法と設計の方法、ツリーとセミラティス、パタン・ランゲージ

3．色彩の基礎と心理効果

基本的色彩語の発展順序、表面色（物体色）、面色（開口色）、顕色系、マンセル表色系、

色相、明度、彩度、日本色研配色体系、トーン、加法混色、減法混色、加法混色の三原色（RGB）、混色系（の色表示システム）、ヤング・ヘルムホルツの三原色説、ヘリングの反対色説、明所視と暗所視、補色、色の同化と対比、色の面積効果、誘目性・視認性・可読性、暖色・寒色、進出色・後退色、膨張色・収縮色、重い色・軽い色、色彩の印象のWARM-COOL軸、色彩の印象のSOFT-HARD軸、清色と濁色、色彩の象徴性

4．プロクセミクス

プロクセミクス、密接距離、個人距離、社会距離、公衆距離、4階建ての制限、距離の分節化の文化差、個体空間（パーソナルスペース）、天井高の変化、むきあう空間（Sociopetal）とそっぽをむく空間（Sociofugal）、対人関係と空間配置、一望監視施設（パノプティコン）

5．領域性

動物のなわばりと人間の生活領域、表出・監視・管理と生活領域のひろがり、領域表示物、個人と家族・職場間の個別性と共同性のバランス、家族と共同体間の個別性と共同性のバランス、個別性追求の悪循環、ソフトな防犯の二側面、領有感のための空間デザイン、監視性の四条件

6．みて移動する空間のデザイン

自然な視線の方向、楽にみられる視対象のおおきさ、D/H比、正の屋外空間、人間の歩行経路の特徴、リンチによる都市のイメージ、認知地図の発達、認知地図のゆがみ

7．環境の色彩デザイン

なじみの原理、トーン・オン・トーン配色、色相の自然序列

レポートの位置づけは、受講生にたいして、以下のとおりアナウンスした。

○成績評価は前期試験の得点にレポートの成績を合計したものを基本として、これに出席点を加味します。

○試験は、基本事項の理解を問う小問形式として、前期末に定期試験としておこないます。参照は一切不許可です。基本事項の範囲については、トピックごとにのべ、試験の前にもういちど確認します。

○レポートの提出は必須です。課題は、「社会学部学舎改善案」とします。レポートの形式は、アレグザンダーのパタン・ランゲージにならい、現状の社会学部学舎の問題点を指摘し、改善案をしめし、その理由をのべるものとします。問題点の指摘や改善案には、図

をもちいてください。A4、横書きで、枚数の制限はとくにありません。提出期限は、定期試験のときまでとします。レポートは、直接担当者にてわたしてください。優秀な内容のレポートについては、環境心理学のホームページで紹介します。
○アンケートのかたちで、不定期に何回か出席をとります。

【参考文献】

Alexander,C. 1965 A City is Not a Tree. *Architectual Forum. April*（「都市はツリーではない」押野見邦英訳 別冊　国文学「テキストとしての都市」前田愛編、学燈社、1984）

Alexander,C., Silverstein,S., Angel,S., Ishikawa,S. and Abrams,D. 1975 *The Oregon Experiment*. Oxford University Press.（「オレゴン大学の実験」宮本雅昭訳　鹿島出版）

Alexander,C., Ishikawa,S. and Silverstein,S. 1977 *A Pattern Language*. Oxford University Press.（「パタン・ランゲージ」平田翰那訳　鹿島出版）

雨宮俊彦　1994　人間と人工環境の相互作用の諸側面、関西大学社会学部紀要、25（3）, 43-81.

雨宮俊彦・内藤健一　2000　社会学部学舎の学生による評価と改善計画についての暫定報告、未発表資料

芦原義信　1974　外部空間の設計、彰国社

川喜多二郎　1986　KJ法－混沌をして語らしめる、中央公論社

小林秀樹　1992　集住のなわばり学、彰国社

小林秀樹　1997　新・集合住宅の時代、NHK出版

小島隆矢　1997　個人差を尊重した印象評定、現代のエスプリ「印象の工学」大沢・西川編、至文堂、99-127、所収

小島・古賀・那須　1996　市民参加型の景観調査により収集された「キャプション」のデータ化とその分析、日科技連多変量解析シンポジウム

内藤健一　2000　スケッチマップの向きの規定因－自己中心的・慣習的参照系の利用に関する検討－、心理学研究、71、3、219-226.

中村攻　2000　子どもはどこで犯罪にあっているか－犯罪空間の実状・要因・対策－、晶文社

Newman,O. 1972 *Defensible Space:Crime Prevention through Urban Design*. Macmillan.（「まもりやすい住空間－都市設計による犯罪防止－」湯川利和・湯川聡子訳　鹿島出版）

吹田市都市整備部都市計画課　1994　くらしが育むまち－景観デザインマニュアル:公共空間、吹田市

吹田市都市整備部都市計画課　1995　くらしが育むまち－景観デザインマニュアル:建築物、吹田市

吹田市都市整備部都市計画課　1996　くらしが育むまち－景観デザインマニュアル:敷際・屋外広告物、

吹田市

吹田市都市整備部都市計画課　1998　くらしが育むまちー景観デザインマニュアル:色彩、吹田市

湯川利和　1987　不安な高層、安心な高層－犯罪空間学序説－、学芸出版社

Zaidel,J. 1984 *Inquiry by Design:Tools for Environment-Behavior Research.* Cambridge University Press.（「デザインの心理学」根建・大橋　監訳　西村出版）

―― 2000.12.13 受稿 ――